卯内尺古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第690集

2001

福岡市教育委員会

卯内尺古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第690集

遺跡調査番号9118
遺跡略号　UNK－1

2001

福岡市教育委員会

序

九州の北岸に位置する福岡市域はその地理的条件から、古代より大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。市内には数多くの遺跡が分布しています。

福岡市ではさまざまな開発によって失われていく自然や文化財について事前の調査を行い、その保存策に努めています。

本書は市内南区に所在した卯内尺古墳の発掘調査報告書です。卯内尺古墳は隣接する老司古墳と並んで福岡市内にあり、比較的古くから知られた古墳でした。

調査は、隣接する中村病院の防災上の観点から行われたものです。

その結果、この卯内尺古墳は古墳時代前期の前方後円墳であったことが明かとなりました。古墳の規模は福岡市内において最大級であり、老司古墳に先行する福岡平野の代表的古墳であったことも判明しました。こうした成果は、本地域の歴史や文化を語る上で重要な手がかりとなるものです。古墳は失われることとなりましたが、今後はこの成果を市民文化や社会教育の糧として生かしていきたいと思います。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。

2001年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例言

1、本書は、医療法人中村病院による造成工事にともない、福岡市教育委員会が1991年７月24日～1991年10月11日に国庫補助事業として発掘調査を実施した、卯内尺古墳の緊急発掘調査の報告書である。
2、本書使用の遺構実測図は、山口譲治、岡崇、小川勝彦、清川朋和、後藤和武、高山義克、松岡、屋山洋、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏が行った。
3、本書使用の遺物実測図は久住猛雄、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏が行った。
4、本書使用の写真は山口譲治、吉留秀敏が撮影した。
5、本書使用の標高は海抜高であり、方位は磁北である。本地域における真北との偏差は６°21′である。
6、本書の執筆は吉留秀敏がおこない、編集は吉留秀敏がおこなった。
7、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。

遺跡名	卯内尺古墳第１次調査	遺跡略号	UNK－1
遺跡調査番号	9118	分布地図番号	40－B－2
調査地地籍	福岡市南区老司三丁目665－3	遺跡登録番号	
開発面積	250㎡	調査対象面積	250㎡
調査期間	19910724～19911011	調査面積	250㎡

本文目次

第1章　はじめに……1
1、調査に至る経過……1
2、調査の経過……1
3、調査組織……3
第2章　地理的歴史的環境……4
1、地理的環境……4
2、歴史的環境……4
3、卯内尺古墳についての既調査・報告……5
第3章　調査の記録……6
1、調査の概要……6
2、基本的層序……8
3、墳丘の調査……8
4、墳丘の復元……12
5、墳丘出土の遺物……18
第4章　埋葬施設と副葬品の検討……29
1、江藤正澄著「福陵雑纂」について……29
2、埋葬施設について……32
3、埋葬施設に関わる遺物……34
4、卯内尺古墳出土と伝える遺物について……34
第5章　まとめ……34

挿図目次

Fig. 1　福岡平野の古墳分布図……2
Fig. 2　卯内尺古墳と周辺の遺跡……3
Fig. 3　卯内尺古墳の周辺地形図……6
Fig. 4　調査前地形図……7
Fig. 5　卯内尺古墳調査区設定状況……8
Fig. 6　卯内尺古墳墳丘上断面土層図……9
Fig. 7　卯内尺古墳葺石検出状況図……10
Fig. 8　卯内尺古墳段築ならびに葺石根石列検出状況図……11
Fig. 9　卯内尺古墳墳丘断面土層図1……13
Fig. 10　卯内尺古墳墳丘断面土層図2……14
Fig. 11　卯内尺古墳後円部南北断面概念図……15
Fig. 12　卯内尺古墳墳丘復元図……17
Fig. 13　卯内尺古墳壺形埴輪検出状況……18
Fig. 14　卯内尺古墳出土遺物1……19
Fig. 15　卯内尺古墳出土遺物2……21

Fig. 16　卯内尺古墳出土遺物３……23
Fig. 17　卯内尺古墳出土遺物４……25
Fig. 18　卯内尺古墳出土遺物５……27
Fig. 19　墳丘出土の玄武岩板石（一部）……27
Fig. 20　その他の遺物……28
Fig. 21　江藤正澄『福陵雑纂』二「古鏡の記」写他……30
Fig. 22　卯内尺古墳出土と伝える銅鏡、銅鏃……31

図版目次

PL. 1……
1. 卯内尺古墳調査前近景（北から）左後方の森は老司古墳
2. 卯内尺古墳調査前近景（南から）
PL. 2……
1. 卯内尺古墳葺石検出状況（北から）左後方の森は老司古墳
2. 卯内尺古墳葺石検出状況（上空から）
PL. 3……
1. 卯内尺古墳近景（西から）1960年代の撮影
2. 卯内尺古墳調査風景（西から）
PL. 4……
1. 卯内尺古墳葺石検出状況（北から）
2. 卯内尺古墳後円部葺石遺存状況（北西から）
PL. 5……
1. 卯内尺古墳後方部葺石遺存状況（東から）
2. 卯内尺古墳二段目くびれ部付近葺石状況（東から）
PL. 6……
1. 卯内尺古墳墳丘に発生した地割れ（西から）
2. 卯内尺古墳三段目葺石遺存状況（北から）
PL. 7……
1. 卯内尺古墳前方部頂平坦面敷石状況（東から）
2. 卯内尺古墳前方部頂平坦面敷石調査状況（西から）
PL. 8……
1. 卯内尺古墳前方部墳丘土層断面１　（東から）
2. 卯内尺古墳前方部墳丘土層断面２　（東から）
PL. 9……
1. 卯内尺古墳後円部墳丘土層断面１　（西から）
2. 卯内尺古墳後円部墳丘土層断面２　（西から）分割写真１～５
PL. 10……
1. 卯内尺古墳壺形埴輪46号検出状況（北から）
2. 卯内尺古墳壺形埴輪50号検出状況（北から）
3. 卯内尺古墳壺形埴輪47号検出状況（北から）

第1章　はじめに

1、調査に至る経過

卵内尺古墳は隣接する老司古墳と並んで福岡市内では比較的古くから知られた古墳である。しかし、早くから土取りなどの造成工事により周囲から壊され、近年では切り立った残丘だけが古墳のごく一部の痕跡を留めるものとして知られていた。この残丘に隣接する中村病院では古墳残丘の周囲に擁護壁を設け保全に配慮されてきた。ところが、近年残丘からの土砂崩落が進み、雨期などには残丘に隣接する道路、建物などにおいての災害発生の危険性がでてきた。病院としては、防災上からやむを得ずこの残丘の除去を計画したのである。

1991年に中村病院から、福岡市南区老司三丁目地内における卵内尺古墳に関する埋蔵文化財事前審査願申請がなされた。対象面積は250㎡である。

当初、申請された残丘は福岡市遺跡分布地図で卵内尺古墳の記載範囲内ではあったが、踏査などから極めて遺存状況が悪く、崖の壁面に葺石らしい円礫や埴輪片がみられるものの、対象地中央がおおきく窪んでいることから墳丘外縁部から墳丘外であると推定した。また、残丘の周囲は高さ10m以上の一部垂直に近い崖となっており、調査そのものはかなり危険であると判断した。福岡市教育委員会では申請地が卵内尺古墳の隣接地にあたり、踏査の結果、古墳の縁辺部と推定できることから、古墳の遺存状況および築造時期などの把握のため事前の埋蔵文化財の確認調査の必要性を認めた。この結果を受けて、中村病院、福岡市教育委員会は文化財保護についての協議をおこなった。現状での保存を検討したものの、防災上古墳の保存は困難であり、発掘調査をおこなって記録にとどめることとなった。

両者は協議を重ね、調査日程などについて打ち合わせをおこない、調査実施のための保安柵などを設置し1991年7月24日から一週間程度の予定で発掘調査をおこなうこととなった。

2、調査の経過

発掘調査の対象地は周囲120mばかりの残丘となっており、壁面は高さ10m以上の切り立った崖となっていた。東側は通路をはさんで病院建物などがあり、土砂や葺石の落下などの危険があり、調査中は万全の注意が必要であった。西側崖下は畑地となっており、通路の確保や排土処理はおもに崖側に行うこととした。葺石と見られる円礫の検出面まで、一部では地表から1mを越える覆土があったが、立地上重機での掘削は困難であり、すべて手作業で行った。

調査地は斜面で足場が悪く、またこの付近では最高所の土地であるために風が強く、崖に近い位置での調査時には転落防止のために安全帯が必要であるなど、作業は困難を極めた。

調査はまず、事前に斜面を掘削し通路の確保からはじめた。次に樹木等の伐採、除去をおこない、土壌ベルトを残し表土を除去した。

表土除去後、まもなく安定した葺石や埴輪の配列が遺存していることなどが判明した。調査以前には否定的であった墳丘の残存は憂慮であると同時にある程度の調査期間延長が必要と判断した。

調査は墳丘葺石の検出、埴輪列の確認、墳丘覆土の記録をおこない、写真撮影、測量などをおこなった。その後、墳丘はトレンチを設け、墳丘内の調査、記録を進めた。旧地表では弥生時代遺物が少量出土した。

調査は予定を大幅に延長したが、1991年10月11日に全作業を終了した。

Fig. 1　福岡平野（郡珂川・御笠川流域）の古墳分布図（縮尺1/16万）

1 塔多1号墳　2 塔多古墳群　3 北畑古墳群　4 剣塚北古墳　5 東光寺剣塚古墳　6 那珂八幡古墳　7 板付八幡古墳　8 新川古墳群 B 群　9 清院古墳群 A 群　10 井尻古墳群　11 竹成A尾古墳　12 須玖古墳群　13 野数B古墳群　14 平尾A墳　15 今塚A古墳群　16 伊都野古墳群　17 大熊唐古墳　18 榎原古墳群　19 椛原2号墳　20 都司古墳　21 御内尻古墳　22 野多目古墳群　23 三千田古墳　24 裕治古墳　25 大谷川古墳群 B 群　26 四王寺古墳群　27 柏原古墳群 1 号墳　28 柏原古墳群　29 小丸古墳群　30 浦ノ田古墳　31 中尾古墳　32 老松神社古墳群　33 野山古墳群　34 御倉塚古墳　35 井尻古墳群　36 若杉山古墳群　37 内若内墳群　38 妙法寺古墳　39 徳出古墳群　40 六万寺古墳　41 イボリ古墳　42 金の隈古墳　43 板付B古墳群　44 須玖御陵古墳　45 野口古墳　46 門田古墳群　47 天神山古墳　48 ウトロ古墳群　49 ウトロ古墳　50 原古墳群　51 ニテ古墳群　52 美鳥古墳群　53 榎板古墳群（仮）　54 貝塚御古墳　55 観音山古墳群　56 観音山古墳群中原1群1号墳　57 平石古墳群　58 西浦古墳群　59 大堤古墳群　60 塚原古墳群　62 別府古墳　63 岡谷古墳　64 吉松古墳　65 底原形古墳群　66 笹原古墳群　67 深町古墳・金山古墳　68 堅山古墳群　69 板口古墳群　70 ウトロ墳　71 北ノ浦古墳　72 新原横穴墓古墳　73 御立表古墳群　74 丸尾古墳群　75 大谷古墳　76 宝満尾古墳　77 宝満尾東古墳群　78 上ノ浦古墳　79 天神森古墳群　80 堂場古墳群　81 立花寺古墳群　82 鏡井古墳群　83 立珠谷古墳群　84 別府古墳群　85 金隈山古墳群　86 七面山古墳群　87 金隈古墳　88 観音ノ浦古墳群　89 仲田ノ浦古墳群 A 群　90 権ヶ辻古墳群　91 宮長浦古墳群　92 観音浦古墳群　93 丸山古墳　94 沼ノ浦古墳群　95 第ノ浦古墳群　96 持田ケ浦古墳群 B 群　97 持田ケ浦古墳群 C 群　98 持田ケ浦古墳群 D 群　99 持田ケ浦古墳群 E 群　100 今宿天神森古墳　101 持田ケ浦古墳群 F 群　102 正源寺社古墳　103 隈塚古墳群　104 剣塚古墳群赤坂山支群　105 御原古墳群　106 中古墳群　107 ウツブキ古墳群　108 赤井手古墳　109 竹ケ本古墳　110 竹ケ本古墳群　111 下白水大塚古墳　112 日拝塚古墳（※ゴチは前方後円（方）墳）

3、調査組織

遺跡の調査では以下の組織を準備した。また、調査、整理作業過程において各方面の協力を頂いた。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第二係

教育長　井口博哉　　部長　後藤　直

課長　折尾　学　　係長　塩屋勝利

調査庶務：中山昭則、入江幸男、吉田麻由美

事前審査：井沢洋一、吉武学

調査担当：山口譲治、古留秀敏

調査補助：屋山　洋、国崇、小川勝彦、清川朋和、後藤和武、高山義克、松岡

整理作業：尾崎君枝、中要田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環、森部順子

調査・整理協力：香波正人、久住猛雄

調査整理にあたって下記の方々・機関のご教示やご指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略、順不同）中村病院、又野　誠・吉武　学（福岡市博物館）、大塚恵治（八女市教育委員会）、古谷　毅（東京国立博物館）

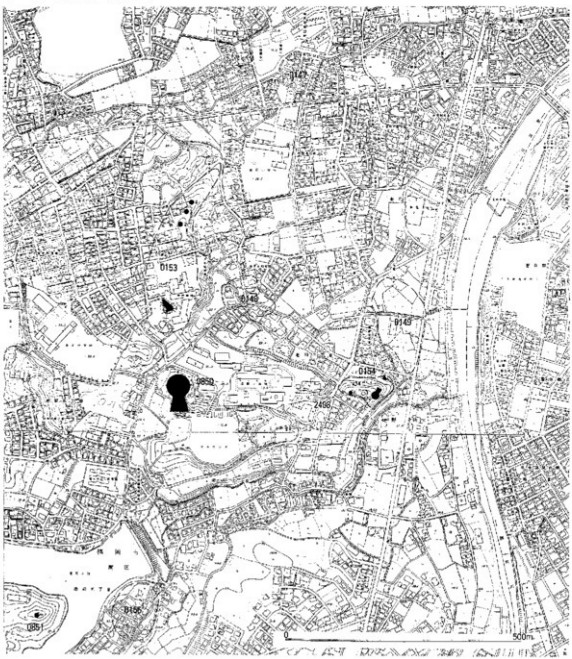


Fig. 2　卯内尺古墳と周辺の遺跡（縮尺１／8,000）

第２章　地理的歴史的環境

１、地理的環境

日本海に面する福岡平野は、北は博多湾を介して玄界灘に開け、南を背振・三群山塊などの急峻な山々に囲まれている。山々から博多湾に注ぐ河川は東から多々良川、御笠川、那珂川などがあり、河川の間には開析の進んだ丘陵や段丘が残されている。卵内尺古墳は那珂川流域の西岸に位置し、背振山系の片縄山（293m）から派生する花崗岩基盤の丘陵上に立地する。付近の丘陵頂部は標高40～50mであり、著名な老司古墳は浅い谷を隔てて本古墳の南側約150mに位置する。

この丘陵と那珂川の間は沖積地であり、現在の国道線に沿って低位段丘崖が南北に認められる。段丘崖は多くが造成により埋め立てられているが、那珂川河川沿いの低地との比高差はおよそ２～３mほどである。なお、この付近の中位段丘面は老司交差点から野多目中央公園付近に分布し、低位段丘との比高差は最大で約４～５mが認められる。この中位段丘の基盤は段丘礫層上にAso－４が堆積している。

ここに報告する卵内尺古墳は、以上のように那珂川西岸の低丘陵上に構築された古墳である。しかし、この一帯は近年、周囲を病院敷地、住宅地などの造成地に囲まれ、旧地形が大きく失われている。したがって、近年古墳の立地状況を読みとることは困難となっている。1960年代の地形図（図４）は、縮尺が大きいために細かな地形は表現されていないが、造成以前のおおまかな自然地形を知ることができる。そして樹枝状に開析された丘陵の頂部から斜面に各所に古墳や古墳群が分布している。このうち野多目池と老司池のあるそれぞれの沖積谷に挟まれた丘陵は、野多目池と鶴田、那珂川をつなぐ東西1.5km、南北800mの範囲がなかば独立丘陵をなしている。この丘陵もまた周囲から複数の開析谷が侵食している。卵内尺古墳はこの独立丘陵の中央付近にあり、丘陵周辺から入る開析谷の分水嶺にあたる位置を選地している。南側に隣接する老司古墳も同様の立地条件である。

ところで、本地域はごく近年まで農業を主体とする村落地帯であった。古墳が所在するこの老司地域は近世から近代までは旧那珂郡老司村と三宅村に属し、他地域より米出荷量が多く、福岡平野では水稲農業の中心地の一つとなっていた。ちょうど本古墳の所在する丘陵地の南側から那珂川西岸の沖積地は大きく広がっている。卵内尺古墳の北東0.7kmの那珂川に設けられた「老司井堰」と用水路「老司川」は、この右岸水田一帯を潤すために近世に那珂川本流に設けられた灌漑施設である。ただし、那珂川本流から井堰や用水路によって灌漑が可能なのは中位段丘より低い土地である。より高位に位置する丘陵斜面や沖積谷部の水量は乏しく、水田経営にあたって谷ごとに溜池を設けて対処している。著名な「野多目大池」は近世初期に築造された筑前国でも屈指の規模を誇る溜池である。これらはいずれも近世の大規模な灌漑施設であるが、地理的条件から見て古代からこの一帯が農業生産の重要な位置を占めていたことは確実であり、そうした土地を見下ろす丘陵上が古墳造営の場所に選ばれたことは、そうした土地開発と何らかの関係も考慮する必要があろう。

２、歴史的環境

ここで卵内尺古墳をとりまく考古学上の歴史的な変遷を時代ごとに概観したい。ただし、本地域はこれまでけっして十分な調査が進められているとは言い難い。それでも旧石器時代から中世、近世に至るまでの資料が断片的に見いだされている。以下では特に弥生から古墳時代について記述する。

１、弥生時代

縄文時代晩期から弥生時代前期は福岡平野において本格的な水稲耕作が開始される時期である。中

～低位段丘上にある野多目A、B遺跡では灌漑用の水路や水口など初期の水田遺構が、同じ段丘上の野多目C遺跡では弥生時代前期後葉～中期初頭の竪穴式住居や貯蔵穴群が検出されている。また丘陵上では和田B遺跡で同前期中葉の40基余りの貯蔵穴群や同中期前葉の土壙などが検出されている。

弥生時代中期後半から同後期前半は遺跡が少ない。同後期後半には野多目A遺跡に集落が展開する。同遺跡は古墳時代前期まで継続し、直線的な区画溝があり一帯の拠点集落と位置付けられる。

2、古墳時代

卯内尺古墳のある那珂川西岸の丘陵地域には前半期古墳が多い。半径1 kmに限ってみても、北から和田B古墳群、野多目古墳群、卯内尺古墳群、老松神社古墳群、野口古墳群、観音堂古墳群などがある。さらに那珂川上流に進むと井河古墳群、若山古墳群、油出古墳群、妙法寺古墳群など著名な古墳群が連続して分布している。このうち、老松神社古墳群と妙法寺古墳群には全長30m以下の小規模な前方後円（方）墳が含まれている。ところでこの地域は中期～後期古墳が少なく、浦ノ田古墳、小丸古墳、中尾古墳などがあり、いずれも群集墳は構成せず、単独墳をなしている。特に前二者は小規模ながら前方後円墳である。

ところで本地域の西側数kmの油山山麓や、那珂川を隔てた東岸の観音山一帯にそれぞれ数百基に達する福岡平野を代表する大規模な後期群集墳が形成されている。両者の中間位置にあって後期群集墳が認められないことは対照的である。こうしたなかで注意される点は、墳丘の遺存が良好であった那珂川町野口古墳群で、古墳時代前期の古墳（群）に対して古墳時代後期に土器供献儀礼の痕跡が認められることである。卯内尺古墳のある那珂川西岸の丘陵地帯では前半期の古墳や古墳群が形成された後、後期古墳や同群集墳の構築は意図的に避けられたと考えられるが、墳墓に対する儀礼はその後も継続された可能性が高い。ただしそれが墓域を移動した後の同族ごとの祖霊祭祀であったかは検討が必要であろう。

3、卯内尺古墳についての既調査・報告

卯内尺古墳に関する主な記録、報告はこれまでに3回行われている。

1、最初の記録は旧秋月藩士江藤正澄の直筆本『福陵雑纂』二（九州大学図書館蔵）にある「古鏡の記」である。その内容は江藤氏が明治20（1887）年10月に帆足可楽氏より卯内尺古墳出土と伝える鏡について聞き取り、記録したものである。これについては後述する。

2、次の報告は、1969年に九州大学考古学研究室で編集された『老司古墳調査概報』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集）の中に、故森貞次郎氏が卯内尺古墳の出土鏡について触れている部分である。この中で森氏は、友人である三木文雄氏を通じて所在不明であった鏡の確認をおこない、合わせて江藤正澄氏の記述の検討と、現地の中村憲之助氏からの聞き取りによって、卯内尺古墳の復元を行っている。そこでは、卯内尺古墳は、1)老司古墳の北西約200mに位置した別の古墳であり、2)墳形は円墳、3)主体部は粘土槨、4)老司古墳の一世代前の同族のもの、と各々推定した。この一文は1989年の『老司古墳』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集）に再録している。

3、3回目の報告は1989年の『老司古墳』報告書に掲載された三木文雄氏による「筑前国卯内尺古墳出土と伝える鏡」である。ここでは所在不明であった鏡の発見のいきさつが示され、鏡は仿製の三角縁獣帯三神三獣鏡であり、同型鏡、同鏡の検討、そして分析を行っている。

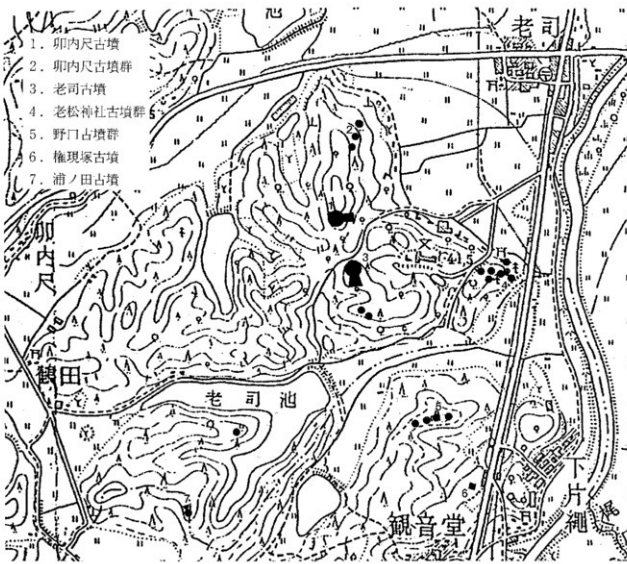
第3章　調査の記録

1、調査の概要

調査対象となった卯内尺古墳は、病院敷地内に残された残丘部分である。この残丘はかつて一帯にあった丘陵頂部の残骸であり、周囲約120m、壁面高10～12mの切り立った崖となっていた。調査前の最高所は南西端で標高約47mを測り、頂部は北東に面する斜面をなす。残丘上で旧地形を残す部分は150m²に満たないものと推定された（Fig. 4）。

また、この残丘の南側にも二ヶ所に残丘が残されている。これらの残丘は標高約40m付近で上部が削平されていて、基盤の花崗岩風化岩が露出している。なお、この二箇所の残丘には遺構の遺存は認められなかったが、その周囲には葺石の転落と見られる円礫が分布していた（Fig. 12参照）。

さて、調査対象となった残丘については、崖下からの観察で壁面に葺石状の円礫が並んでいるのが認められ、崩落した土砂の中に少量の土器片が発見できたことで古墳の痕跡が遺存する可能性があった。しかし、崖に作業用の通路を掘削、確保し作業を開始する段階では、残丘上は北側に下がる予想以上の急斜面であり、各所に土取りや風倒木があり荒れていた。地表では墳丘の痕跡を認めることは困難であり、森貞次郎氏の推定される円墳であるとするなら、残丘上に墳丘の一部が残されているのは絶望的と見られた。



1960年発行国土地理院地形図を引用、加筆

Fig. 3　卯内尺古墳の周辺地形図（縮尺 1／10,000）

発掘は当初土砂や葺石の落下防止、作業員の危険回避のために周囲に１ｍほどの未調査区を設けた。葺石と見られる円礫の検出面まで一部では地表から１ｍを越える覆土があった。覆土除去後、まもなく安定したくびれ部付近の葺石が予想外に安定して遺存していることが判明した。この時点で本古墳が円墳ではなく、段築をもつ大型の前方後円墳であったことがわかった。そのために調査期間の延長と新たな記録作業が必要と判断した。

調査は墳丘葺石の検出、埴輪列の確認、墳丘覆土の記録をおこない、写真撮影、測量などをおこなった。その後、墳丘はトレンチを設け、墳丘内の調査、記録を進めた。また、対象地の調査終了後に墳丘復元のために周辺地形の測量作業も行った。

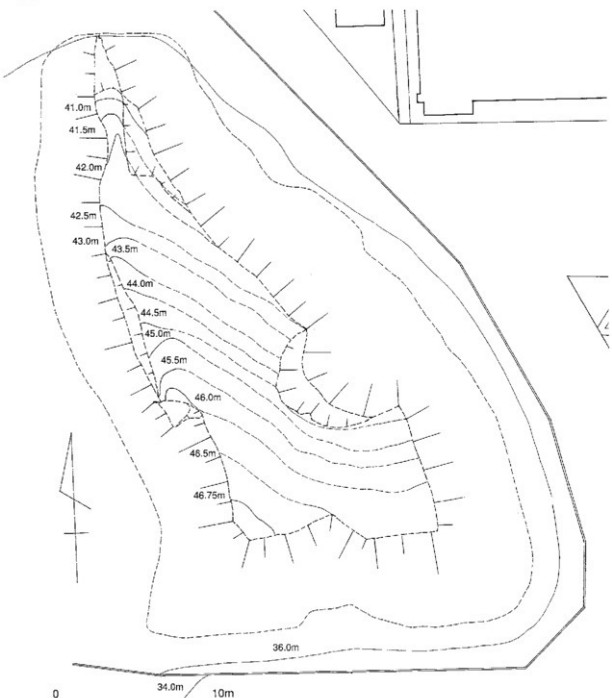


Fig. 4　調査前地形図（縮尺１／250）

なお、くびれ部の下方には幅6mほどの土取りの跡があり、近年の大幅な造成後、この部分は幾度も地すべり状に崩壊を広げていた。また、後円部から前方部にかけて地割れが発生し、上部で幅約20cm広がり、合わせて南側が全体に30cm前後下がっている。なお、この地割れは崖壁面の観察から本来古い断層が、近年の周囲の土取りにより新たに地すべりを発生したものと考えられた。作業中も危険なために崩落に注意しながらの調査となった。

2、基本的層序

卯内尺古墳は那珂川西岸の丘陵上に立地する。この丘陵は花崗岩を基盤とし、上部に薄く風化土と堆積層を被覆する。風化土はいわゆる花崗岩バイラン土であり、上部ではスコップで容易に掘れるほど軟質である。下位にしたがい硬質化する。この上部の堆積層は花崗岩風化土とレスの混在層であり、黄褐色を呈する比較的堅い堆積土である。丘陵上の谷地形以外ではAso-4火山灰やAT起源の火山ガラスも明確には認められない。こうした堆積層は上部の暗色の腐植土と漸移的に連続している。

3、墳丘の調査（Fig.4～10）

墳丘は前方後円墳のくびれ部の一部を検出した。葺石や埴輪列の分布から前方部を東に向けて構築されている。前方部、後円部ともに三段築成である。

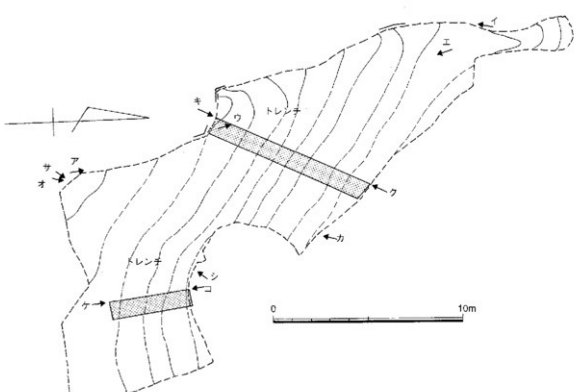


Fig. 5　卯内尺古墳調査区設定状況（縮尺1／200）

葺石より上部の覆土は二ヶ所の土層図、葺石より下位の墳丘内については三ヶ所の土層図を作成した。

葺石上には最大１ｍを超える覆土があった。後円部側の二ヶ所で覆土の観察をした（Fig.６）。

まず、前方部に近いオ－カ断面では、葺石上に10～30cm 程度の旧地表と見られる黒色腐植土があり、その上に約１ｍの連続した堆積がある。この堆積は地山である花崗岩バイラン土を主とし、比較的軟質であり、最上部の現地表面に腐植土を形成している。この覆土中には特に下半部に葺石材と見られる円礫や玄武岩板石を含んでいる。次に後円部のウ－エ断面では、葺石上に10cm 前後の旧地表と見られる腐植土があり、その上に約１～1.4ｍの覆土が堆積している。この覆土は薄い腐植土を挟んで上下に区分される。いずれも地山である花崗岩バイラン土を主とするが、下部はやや硬くしまり、遊離した葺石材と見られる多くの円礫や少量の玄武岩板石を含んでいる。上部の覆土はオ－カ断面と同様であり、軟質である。これらの堆積状態から見て葺石を覆う腐植土より上位は比較的近年に堆積した覆土であり、葺石材を含んでいることからみて、後円部上段の削平段階に堆積したと見られる。なお、ウ－エ断面ではその堆積が分かれることから、後円部の削平は少なくとも二時期あったと考えられる。

さて、前方部は、北側くびれ部～側面の一部と前方部上平坦面が確認できた。側面は一段目の段築

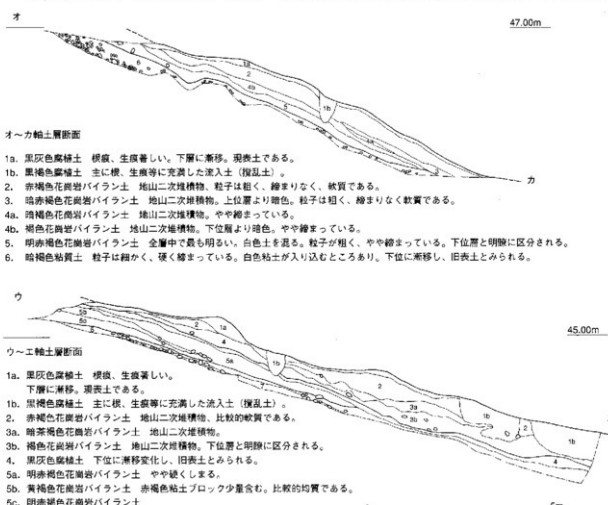


Fig. 6　卯内尺古墳墳丘上断面上層図（縮尺１／100）

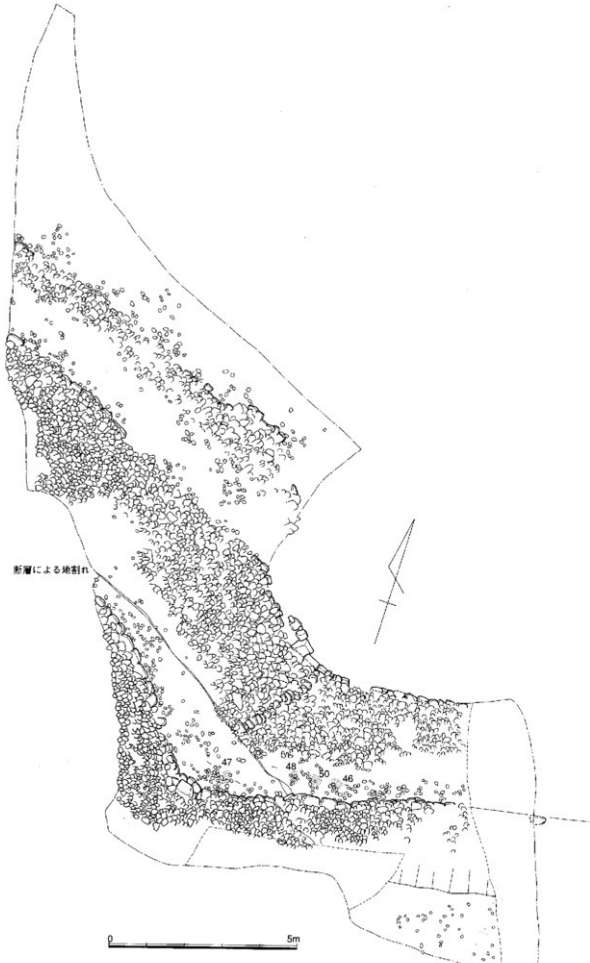


Fig. 7　卯内尺古墳葺石検出状況図（縮尺１／100）

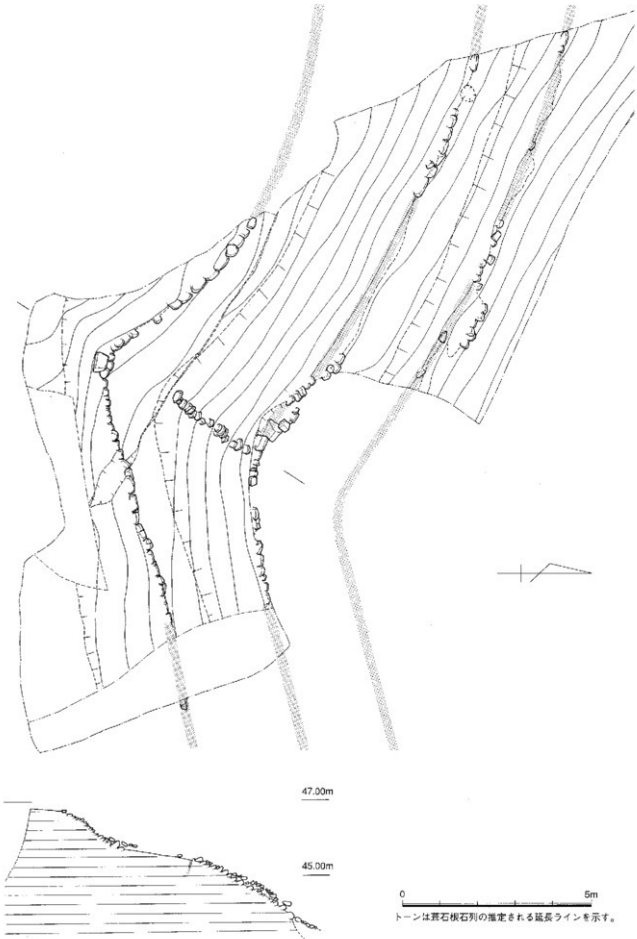


Fig. 8　卯内尺古墳段築ならびに葺石根石列検出状況図（縮尺１／100）

面まで土取りにより失われており、一、二段目葺石と二段目、墳頂平坦面が部分的に遺存している。前方部頂の平坦面は最大幅約２mほど遺存する。

葺石は二、三段目共に同様の構築状況であり、まず30cm前後の円～亜角礫を根石として段築平坦面墳丘側に配列し、それを基礎とし、径20cm前後の円礫を斜面に貼り付けるように構築している。二段目葺石の傾斜は約20～25°、二段目葺石の傾斜は約25～30°を測る。なお、構築にあたっての葺石としての円礫の使用は、礫の長軸を斜面に直角に突き刺すように据え、墳丘側を低くして固定している。したがって、墳丘外面に葺石が突き出しているように見られる。なお、葺石構築にあたっての縦方向の区画線となる石列は二段目くびれ部で確認できた以外は判断できなかった。くびれ部での区画はやや大きな石を使用している。前方部側方の葺石の延長は二段目で４m、三段目で９mを確認したが、それより先は造成により失われている。

前方部での段築二段目平坦面は幅約１mが残されている。ただし一段目葺石上段が失われていることからみて、この数値は多少少なくなることが予測される。前方部頂平坦面ならびに段築二段目平坦面には敷石が認められた。敷石は葺石より一回り小さい径10cm以下の円礫を用いている。この敷石は平坦面上に集中して分布するものの、ほとんどが破壊し、安定した面をなしていない。老司古墳のようにタイル状に構築されていたかは明らかでない。

前方部の墳丘内の盛土はケーロ断面で観察できた。ここでの盛土の状況は特異である。基盤の花崗岩パイラン土は葺石の下位で浅く出現するが、全体に旧表土が失われており、一度段築状に整形され、それぞれの段築ごとに水平の盛り土が行われている。盛土の厚さは二段目で30～40cm、三段目で50cm以上と見られる。三段目の盛土の最初の構築面に炭化物が薄層堆積しており、注意される。また、前方部頂平坦面東端の敷石を除去したところ、直接基盤面が現れた。少なくとも前方部中央部の一部は基盤である花崗岩パイラン土を削り出したのみで、その上には盛土がなかったと考えられる。

後円部は、くびれ部～後円部側面への一部が確認できた。ただし後円部中央方向からの土取りにより大きく失われており、一～三段目葺石と一、二段目平坦面が部分的に遺存している。墳頂平坦面は遺存していない。なお現状での最高所である標高47m付近は近年平坦にならされ、測量用のコンクリート基準点が設けられていた。

葺石は前方部側と同様の構築状況であり、まず30cm前後の円～亜角礫を根石として段築平坦面墳丘側に配列し、それを基礎とし、径20cm前後の円礫を斜面に貼り付けるように構築している。

後円部一段目の葺石は、平面でくびれ部から約14m付近まで遺存する。その根石列はくびれ部付近が土取りのためにまず大きく失われている。さらに全体として保存状況が悪く、根石のうち原位置を保つのは僅かである。遺存するものも多くがずれたり失われている。根石上に設けられた葺石も安定して遺存するのは僅かである。

後円部二段目の葺石は、平面でくびれ部から約12m付近まで遺存する。その根石列はくびれ部付近の根石が土取り後の地すべりで原位置から数十cmずれ落ちている。また、後円部側の調査区中央付近が大きく失われている。根石上の葺石は密度が高く、保存状態も比較的良い。

後円部三段目の葺石は、平面でくびれ部から約６mまで遺存する。根石列は比較的保存が良い。しかし、墳丘構築以降（土取り後断層拡大か）、二段目平坦面上に断層が発生し、西～南側が30cm前後下がっている。

4、墳丘の復元

すでに幾度も記してきたように、本古墳は調査時点には原型をとどめないほど破壊されていた。調

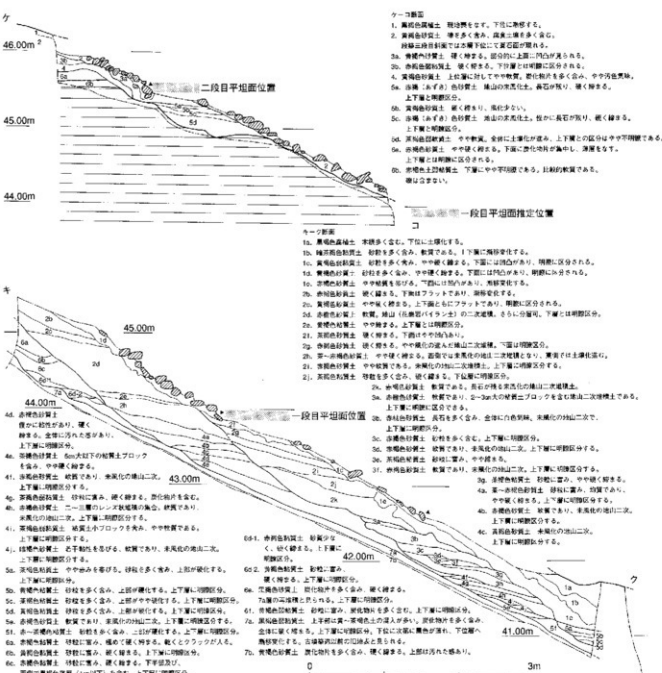
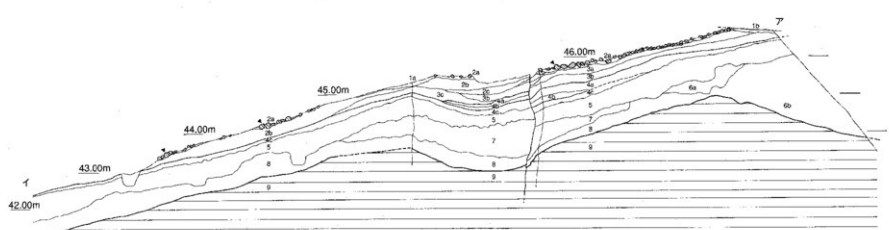


Fig. 9　卯内尺古墳墳丘断面土層図１（縮尺１／50）



アーイ断面

1a. 灰褐色腐植土　現地表である。墳丘二段目斜面に薄く堆積する。

1b. 黒褐色腐植土　墳墓表である。墳丘三段目上の削平面に薄く堆積する。

2a. 暗黄褐色砂質土　径5cm以下の砂礫を多く含む。やや粘質を含み硬く締まる。

2b. 赤褐～赤橙色砂質土　地山の二次堆積物であり、硬く締まる。
　層の厚い部分では明るく、薄い部分では褐色気味となる。

2c. 赤橙～小豆色砂質土　未風化部分の多い地山二次堆積土。

3a. 赤褐～黄褐色砂質土　黄色粘質土ブロックを少量含み、硬く締まる。上下層とは明瞭区分。

3b. 黄褐色砂質土　径5cm以下の石英円礫をまれに含み、硬く締まる。

3c. 黄褐色土ブロック混じり赤褐色土　部分的なレンズ状堆積であり、硬く締まる。

4a. 黒褐色砂質土　黄～赤褐色土のレンズ状ブロックを層理状に挟む。
　北側（斜面下方）にしたがい暗色がうすれ、南側（斜面上方）にしたがい暗色が増す。上下層とはフラットに接する。

4b. 赤褐色砂質土　黒色砂質土のブロックを含み、やや硬く締まる。

4c. 黒褐色砂質土　黒色が強く、炭化物片を多く含む。上面は平坦、下面は凹凸を見せ、やや薄形をする。

5. 黒褐色粘質土　炭化物片や径5cm以下の円礫を多く含む。上部はやや軟質、下部は粘質を帯びる。

6a. 黄褐色砂質土　花崗岩起源の礫を含み、やや軟質である。炭化物片を少量含む。

6b. 花崗岩質れき層　径15cm以下の礫を主体とし、礫間はバイラン土が充填する。無層理で右英円礫を少量含む。
　下面は不整合、フラットであり、黒色薄層（鉄分かマンガン質か）が形成されている。

7. 茶褐色礫粘質土　砂礫や5cm以下の右英円礫を含み、硬く締まる。上面は凹凸をなす。
　断面層中から旧石器とみられる黒曜石小片を採集した。

8. 赤褐色粘質土　砂礫を多く含み、硬く締まる。上面は凹凸、下面はフラットに接する。

9. 花崗岩バイラン土　上部は軟質であり、スコップで容易に掘れる。下部に従い硬くなる。

▲印は定石標石を示す

Fig.10　卯内尺古墳墳丘断面土層図２（縮尺１／100）

査の結果、前方後円墳のくびれ部の一部を検出することができた。ここでは困難であるが、墳丘復元を試みたい。

まず、遺存していた後円部各段の根石列は僅かであったが、その曲線から円周を復元し、直径を求めたい。一段目、二段目は墳丘が不安定であり、遺存状態が良くない。想定位置から復元すると一段目が径60～40m、二段目が52～36mとなる。三段目は断層の影響で平面位置がずれていると見られた。これも現状で復元すると径16～30mとなる。推定値の許容幅が大きいのは根石列から読み取る円弧が歪んでいることや、くびれ部付近で後円部の円弧が次第に前方部に切れ込むためである。また、それぞれの中心位置は同じ軸線上にはのらず、ずれがある。これらの誤差は、本古墳の保存状況が悪いことと共に、古墳が丘陵上に築造されていることにも原因が求められる。丘陵上に設けられた古墳の多くは旧地形に影響され、平面上で厳密な円周や直線という設計ラインを取ることは稀である。

さて、こうしてみると本古墳の後円部径は、外周である一段目墳裾線で直径60～40mという不明確なものとなる。この復元の数値をより絞り込むために、改めて資料の検討を行う。本古墳に関する記録や古地図は少ない。

まず、明治20年以前の発掘記録である旧秋月藩士江藤正澄の自筆本『福陵雑纂』二「古鏡の記」の中にこの古墳について次のように記されている。古鏡を掘り出したのは「俗に城辻山と云う小山の頂き…」「頂上は凡そ三十坪も有りぬべし、周りに石垣を築きたり」とあり、小山の頂上に30坪弱、つまり100㎡弱の平坦地の存在が推定できる。頂部の周囲には石垣とあり、畳石に関連する石の存在も記されている。100㎡は直径11m弱と計算できる。もちろんそれがそのまま後円部墳頂の広さと考えてよいのかは疑問である。

次に1960年代後半に考司古墳調査中に撮影された写真（図版３－１）を検討したい。この写真は卯内尺古墳を西側から撮影したものであり、写真左側、すなわち北側に現在も残っている病院建物の屋根が見られることから比較が容易である。この写真を図化したものがFig.11である。これから見るとこの撮影時点ではなお後円部墳丘の南側も一部が残っていることがわかる。しかし、既に後円部の後

図版3-1を図化した（墳丘を西側より撮影している）

Fig.11　卯内尺古墳後円部南北断面概念図

方から中央付近は造成に伴い大きく削平されている。調査時点に残されていた墳丘は、後円部北側の崖線上場ラインと大きく崩れた断層線（図ｂ点直下）の位置から、図上ａ－ｂ間の範囲である。調査結果からこの間のｘ点に墳端が確認できたわけである。

さて、墳丘頂部にあたるｂ－ｃ間は大きく抉れている。この抉れの右側、墳丘南側斜面にあたるｃ－ｄ間は、ａ－ｂ間と対象的な崖線のラインを示している。つまりこの部分には北側斜面と対称形をなす後円部南側の墳丘が遺存していたと考えられるのである。その場合、一段目横石列すなわち本古墳の後円部墳端の位置は写真ｄ点の左側のｙ点付近にあったと予測される。また、後円部を南北に断ち切る崖線の南側前面に平坦な遺状の造成面ｅ－ｆがみられる。これは位置から見て、調査時にも遺存していた残丘にあたると見られる。

なお、以上の点と崖前面の造成地や道路の位置からみて、この写真は墳丘断ち割りの崖に対し、ほぼ直角方向に70～80m離れた場所が撮影位置であったと考えられる。こうした点を前提に写真から計測すると、各点の距離は概数であるがおおよそ以下のようになる。

ａ－ｂ間＝27m、ｂ－ｃ間＝11m、ｃ－ｄ間＝26m、ｅ－ｆ間＝22m

この数値を改めて平面上において見ると、Fig.12で示す位置関係となる。写真撮影の段階ですでに後円部の中心部を大きく失っているが、この時点で古墳の南くびれ部から約10mのあたりに崖線ができていたと考えられる。墳端の推定位置ｘ－ｙ間は写真から読み取ると概ね42～45mと推測できる。ただこの場合、この崖線の位置は後円部の中心よりくびれ部に偏っているために、平面上での崖線の復元線が多少とも東西にずれると、墳丘の復元は大きく変わることになる。とはいえ、後円部最大径は少なくともこの推測値（42～45m）より大きいと考えられる。

また、墳丘周辺調査の過程に写真においてｅ－ｆとした残丘の南側断面において葺石の転落と見られる円礫の分布を確認した（Fig.12参照）。この分布は調査した墳丘一段目北隅くびれ部から45～50m離れた場所を北限としている。後円部の南側墳端はこの北限に近い位置にあったと予測されるのである。

以上の検討から本古墳の後円部は三段築成であり、一段目外周でおおよそ45～50mと推定できる。次に前方部の推定であるが、復元に際して検討できる資料は少ない。

調査の結果、前方部墳丘は三段築成であり、三段目においてくびれ部から約10mの長さまでは確認した。あとどれくらいの長さがあったのであろうか。

まず、前方部の平面形態を復元したい。調査した北側くびれ部において、後円部と前方部の接続角は二段目で約120°三段目で約110°を測る。これで前方部両側が平行するいわゆる「柄鏡形」をなすと仮定するなら、前方部幅はおよそ22mとなる。墳形についてはなお不明であるが、前方部幅が平行より狭まることは考えられず、幅についてはこれを最小規模と見ることができよう。

前方部前面は本来谷地形となっており、現在の病院敷地の造成面との境界は崖線となっている。崖線の踏査の結果、前方部前面の崖は自然地形を残しており、南側の病院入り口付近は古墳側に食い込む谷地形を造成により埋め立てて平坦地としている。また、調査した北側くびれ部にも小規模の谷地形があり、古墳造営以前の前方部側の丘陵地形は痩せ尾根状をなしていたと見ることができる。特に前方部前面にあたる谷は幅が大きく深い。したがって前方部前面がこの谷地内までのびることはない。墳丘遺存部と谷の中間に位置する病棟付近に墳端があったと推定できる。前方部の復元についてのこれ以上の資料はないが、自然地形と矛盾せず構築可能な規模として、図13のように長さ28mで復元し

てみた。平面形態については前方部両側の谷地形など、自然地形の影響がどの程度あったか明確ではなく、ここでは丘陵上で古墳主軸を5°ほどずらした場合の二案を示した。

以上の本古墳の復元作業の結果、現時点で予測した墳丘規模の推定値は以下のようになる。

全長73～78m
後円部径45～50m
くびれ部幅24～26m
前方部長推定約28m
前方部幅28～34m

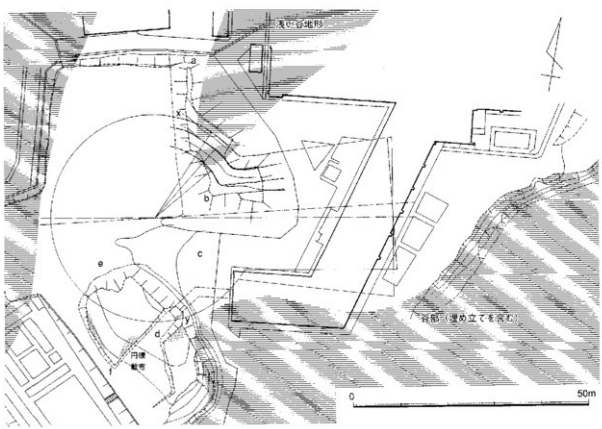


Fig.12　卯内尺古墳墳丘復元図（1／800）

5、墳丘出土の遺物

1）出土状況（Fig.14）

墳丘斜面からは土器片が多く出土した。ほとんどは墳丘斜面や、平坦面の葺石、敷石間もしくは上面にて出土し、特に葺石の覆土中から多く出土した。土器片の多くは壺形土器であるが、形象埴輪片1点もあった。また、葺石覆土から玄武岩の板状石材が出土した。ここでは古墳において出土、採集したこうした石材も合わせて報告する。

なお、埴輪の樹立は二段目平坦面に壺形埴輪の底部が僅かに遺存する例を4ヶ所確認できた。この樹立はくびれ部の前方部側であり、底部3個体（46、48、50）が東西に20cm 間隔で並び、その西端から1.4m 離れてさらにもう1個体（47）が検出できた。いずれも平坦面の盛土上を10～15cm 程度掘り窪めて据え置いてあったと見られる。いずれも細かく破砕し、底部から胴部下半の破片が僅かに原位置をとどめていたに過ぎない。

46は比較的保存がよく胴部中位～下半部の南～西側は遺存していた。50はほとんどの破片が二次的に動いていたものの、底部付近は比較的遺存していた。48は全ての破片が動いていたが、底部付近の破片が掘り方内に張付くように遺存していた。また、口縁部破片30も混在出土し、接合はしないが一個体を復元可能な例となった。47は、胴部下半から底部の破片が掘り方内に貼付くように出土した。ただし、原位置はとどめていない。

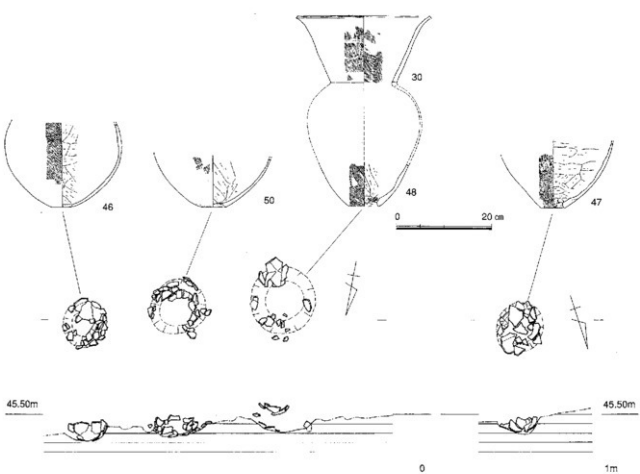


Fig.13　卯内尺古墳壺形埴輪検出状況（1／8、1／20）

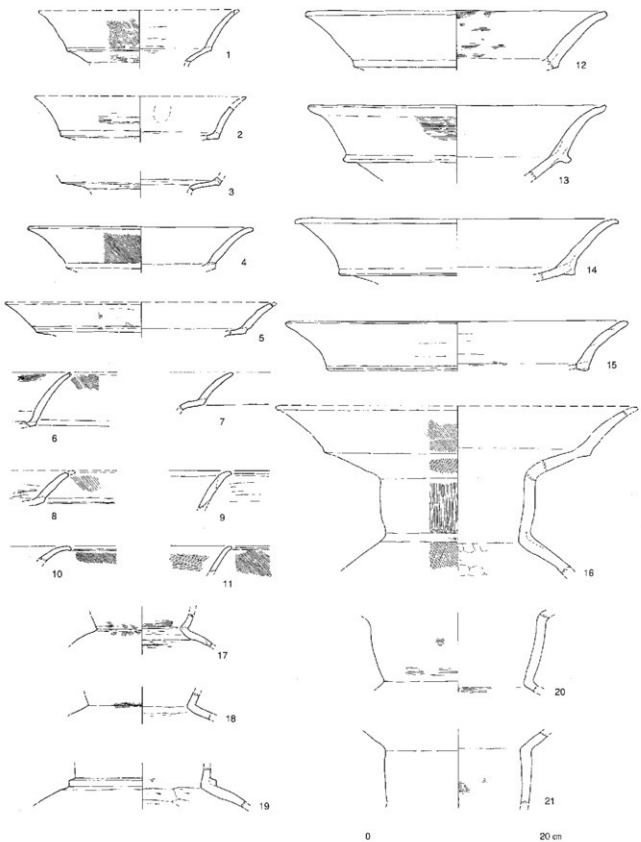


Fig.14　卯内尺古墳出土遺物１（縮尺１／４）

2）出土遺物

1、埴輪

出土遺物は壺形埴輪と形象埴輪がある。円筒形や朝顔形埴輪は検出されていない。主体となる壺形埴輪は小破片が多いが、多くに焼成時の黒斑が認められる。これらは二重口縁系（A類）と単口縁系（B類）に区分される。以下ではこの区分に沿って説明、報告する。

a、壺形埴輪A類（Fig.14、15）

この形態の土器は概して破片が小さく全体を復元できる個体が少ない。また、個体ごとの胎土、調整、焼成などの特徴や、法量などに較差が大きく、一律にあつかえない。胎土は砂粒の少ない水濾粘土に類似する極めて精製で、赤～橙色気味の色調をもつもの（a類）と、少量の砂粒を含むものの水濾粘土に類似し、やや赤褐色気味の色調をもつもの（b類）、花崗岩起源とみられる砂粒を多く含み、茶～黄褐色の色調をもつもの（c類）の三群に区分される。このうちa、b類は埴輪の胎土というより、古式土師器の小型精製器種などにみられる胎土に類似している。

1～18は口縁部破片である。このうち口縁径が実測推定により復元可能なものは1～5、12～16の10個体である。口縁径では25cm以下の小型（1～4、A1類）、26～35cmの中型（5，12～14、A2類）、36cm以上の大型（15，16、A3類）に区分される。以上の全ての外面に赤色顔料の塗布痕跡がある。また、これ以外にも小破片であるが、壺形埴輪A類とみられる土器片は多い。このうち口縁部8点、頸部～肩部破片4点、胴部2点、底部3点を図化した。

A1類：1は口径約21cmで、屈曲部から急角に口縁端部へ立ち上がる。胎土はa類で器壁は薄く、器面は摩滅が進んでいる。調整は外面斜めハケ、内面横ナデで仕上げる。2は口唇部を欠損するが、同様の器形、調整である。胎土はb類で摩滅進む。3は口縁屈曲部より頸部までの一次口縁部の破片である。端部での傾斜は水平に近い。胎土はb類で、1、2と同様の器形、調整である。4は口縁径約24cmで、屈曲部より緩やかに立ち上がり、口唇部を丸く仕上げる。胎土はb類で器壁はやや厚く、器面の摩滅は少ない。調整は外面斜めハケ、内面横ナデである。

A2類：5は推定口径28cmで、一次口縁部は水平に近く、屈曲部から緩やかに短く立ち上がる。胎土はa類であり、器壁は薄く、摩滅が進んでいる。調整は不明瞭であるが、外面に横ハケと横ナデの痕跡がある。12は口径約34cmで、屈曲部から緩やかに立ち上がり、口唇部をやや下方に引出し気味に丸く仕上げる。また屈曲部外方に断面三角形状の突帯を貼り付ける。胎土はc類で、器壁は厚い。調整は外面横ナデである。13は口径約32cmであり、前者と同様の特徴をもつが、口唇部の引出しがあまく屈曲部の突帯は低い。胎土はc類、器壁は厚く、外面がやや摩滅している。調整は内面に横ハケがみられる。14は口径約32cmで、一次口縁と二次口縁が連続した外傾をなし、断面「く」字形に形成される。口唇部はやや上方に引き出し気味に丸く仕上げる。屈曲部外方の突帯は高く、断面台形に近い。胎土はb類で、器壁は厚い。調整は外面横ハケである。

A3類：15は口径約36cmで、水平に近い一次口縁部から外反する二次口縁部が短くのびる。屈曲部外方は明瞭な突帯をなさない。胎土はa類で、器壁はやや薄い。内外面共に摩滅が進むが、内面に横ハケがみられる。16は接合しないものの後円部二段目斜面にて近接して出土した同一個体の肩部、頸部、口縁部などの十数点の破片からなり、ある程度全体を知ることのできる資料である。推定口径約38cm、頸部径15～16cm、肩部から口縁までの高さ約14cmを測る。なで肩から、エンタシス状の頸部を経て断面「く」字形の口縁部につながる。口縁屈曲部外方には突帯は付けない。胎土はc類で、器壁は厚い。調整は外面が口縁部斜めハケ、頸部～肩部縦ハケ、内面が口縁～頸部不明、肩部指押さえ、ナデである。

6～11は口縁部であり、口径の復元は困難であった。6は口縁部が屈曲部から緩やかに立ち上がり外反する。胎土はb類であり、器壁は薄い。外面斜めハケ後横ナデ、内面横ハケ後ナデである。7、8は屈曲部から緩やかに立ち上がる。何れも胎土はa類で器壁は薄い。7は器面の摩滅が進み、内面縦ハケ、外面横ナデの痕跡がある。8は口唇部が摩滅し不明であるが、器面の外面斜めハケ後横ナデ、内面横ナデである。9は口縁部の開きが緩やかであり、かつ直線的である。器壁は薄く、口唇部には強い面取りがある。胎土はb類である。器面は摩滅が進むが外面はナデか。10は口縁部が強く外反し、さらに口唇部を面取り状に調整し、下方へ引き出す。胎土はb類であり、器壁は薄い。外面は細かな斜めハケ、内面は横ナデとみられる。11は直線的に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げる。胎土はb類、外面斜めハケ、内面横ハケである。

17～21は肩～頸部である。それぞれ形態が異なる。17は肩部から頸部にかけての破片であり、肩部径約10cmと小型である。肩部から頸部が強く膨らむ。胎土はb類であり、器壁は薄い。肩部内面は弱い横ヘラ削り後ナデ、頸部内面は横ハケ後ナデ、外面は摩滅が進むが、縦ハケとみられる。18は肩部から頸部にかけての破片であり、肩部径約11cmと小型である。肩部から頸部が強く膨らむ。胎土はb類であり、器壁はやや薄い。肩部内面には1cmほど横ナデが残り、その下位はヘラ削りである。頸部内面は摩滅するが、横ナデとみられる。外面は縦ハケ後横ナデである。19は肩部破片であり、径約15cmを測る。胴部は球形とみられ、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。くびれ部に断面三角形の突帯を貼り付けるが、こうした特徴は今回の本古墳出土埴輪では唯一例である。胎土はc類であり、器壁は厚い。肩部内面は横ヘラ削り、頸部は横ハケ後ナデ、外面は摩滅が著しく、突帯付近に横ナデがみられるのみである。20は頸部破片である。頸部中央は膨らみ、径は下部で約16cm、上部で19cmを測る。胎土はc類であり、器壁は厚い。肩部内面はヘラ削りで屈曲部は横ハケとなる。頸部は内面は不明であるが、外面は横ハケ後ナデがみられる。21は頸部から一次口縁部下端までの破片である。頸部

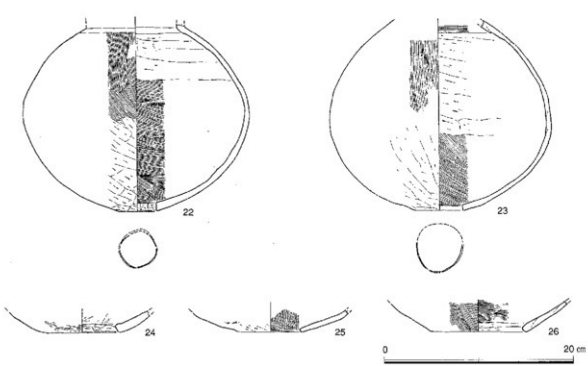


Fig.15　卯内尺古墳出土遺物2（縮尺1／4）

中央は膨らみ、径は頸部上位から中位は約15cmを測る。胎土はc類であり、器壁は厚い。肩部内面は横ヘラ削り、頸部は内面不明、外面横ハケ後ナデ、外面は摩滅が著しく、突帯付近に横ナデがみられるのみである。

22、23は胴部である。22は胴部上半部と頸部より上部を欠損する。最大径約24cm、胴部高19.5cmを測る。胴部の最大径はほぼ中央にあり、底部に焼成前穿孔がある。底部穿孔は径約4cmの円形であり、穿孔部端面には丁寧なヘラ切面がみられる。胎土はb類であり、器壁は比較的薄い。胴部内面上半部は指押さえ後ナデ、さらに浅いヘラ削りである。中位～下位は横ハケである。胴部外面は中位付近を境に上部が縦ハケ、下部が斜めのヘラ削りである。23は胴部上半部1／4、下半部1／2が遺存する。胴部最大径は約23.5cm、胴部高約21cmを測る。胴部の最大径は中央よりやや下位にある。底部に焼成前穿孔がある。底部穿孔は径約5cmの楕円形であり、還考部端面には丁寧な面取りがみられる。胎土はb類であり、器壁は比較的薄い。胴部内面上半部は横ヘラ削り後ナデである。下半部は斜めハケである。胴部外面は最大径付近を境に上部が縦ハケ、下部が縦～斜めの丁寧なヘラ削りである。

24～26は底部である。24は焼成前穿孔のある底部破片である。底部穿孔は径約7cmの円形に復元される。穿孔部端面にはやや荒い削りがみられる。胎土はb類であり、器壁はやや厚い。内面ヘラ削り後ナデである。外面はヘラ削り後ナデ、横ミガキとみられる。25は焼成前穿孔のある底部破片である。底部穿孔は径約6cmと復元される。胎土はb類であり、器壁は薄い。内面は丁寧な斜めハケ、外面はヘラ削り後斜めハケとみられる。26は焼成前穿孔のある底部破片である。底部穿孔は径約9cmと復元したが、小破片であり、検討を要する。胎土はa類であり、器壁は薄い。内面は横ハケ後ナデ、外面は縦ハケである。

b、壺形埴輪B類（Fig. 16、17）

この形態の土器は焼して破片が大きく、ある程度の復元をできる個体がある。厳密な割合は示せないが、今回の調査で出土した埴輪片の過半数を占めているのは確実である。なお、個体ごとの胎土、調整、焼成などの特徴や、法量などに較差は少ない。胎土は壺形埴輪A類でみた区分のうちa類が存在しない。

27～44は口縁部破片である。このうち口縁径が実測推定により復元可能なものは1～41の15個体である。口縁径で明瞭に区分することは困難であるが、25cm以下の小型（27、32～36、B1類）6個体、26～29cmの中型（28～31、37、38、40、B2類）7個体、30cm以上の大型（39、41、B3類）2個体に分かれる。以上の全ての外面に赤色顔料の塗布痕跡がある。また、これ以外にも小破片であるが、壺形埴輪B類とみられる土器片は多い。このうち口縁部3点、頸部～肩部破片2点、胴部～底部6を図化した。

B1類：27は口唇部から頸部まで遺存する。破片は大きくないが、計測により復元ができた。口径約23cm、頸部径約14.5cm、頸部から口縁部までの高さ約14.5cmである。口縁部は頸部から直線的に立ち上がる。口唇部は面取りがあり、端部は凹線状となる。胎土はc類であり、頸部に向かって次第に器壁は厚みを増す。調整は口縁部外面が縦ハケ後横ナデ、内面は斜め～横ハケ後ナデ、肩部内面は僅かであるが横位ヘラ削りがみられる。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。32は口縁部破片である。口径約21cmである。口縁部は大きく開き、緩やかに外反している。口唇部は強い面取りがあり、端部は断面コ字形となる。胎土はc類であり、器壁は比較的薄い。調整は

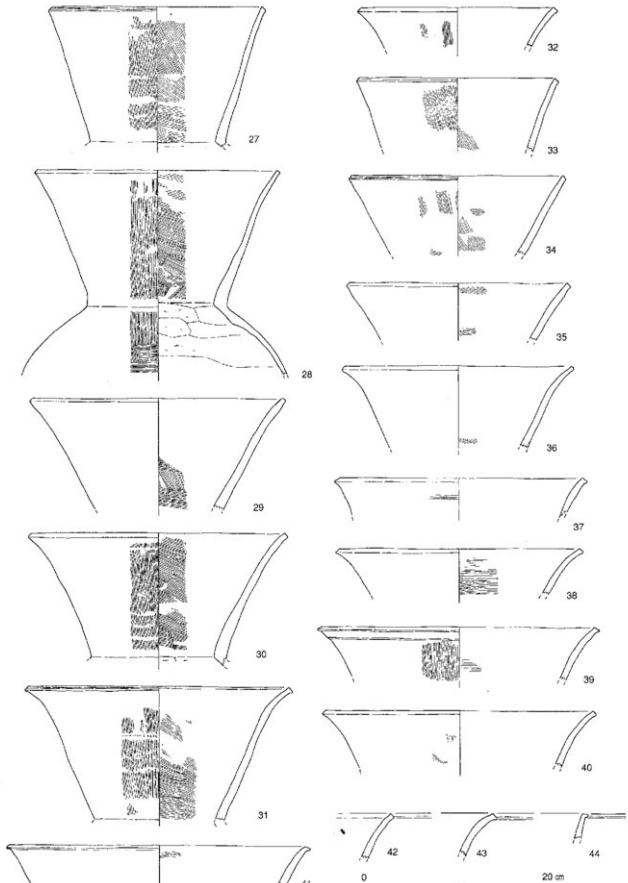


Fig.16 卯内尺古墳出土遺物３（縮尺１／４）

口縁部外面が縦ハケ後強い横ナデ、内面は横ナデである。33は口縁部破片である。口径約21.5cmである。口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は面取りがあり、端部は僅かに凹線状となる。胎土はc類であり、器壁は比較薄い。調整は外面が縦ハケ後横ナデ、内面は斜めハケ後横ナデである。34は口縁部破片である。口径約33cmである。口縁部は頸部から直線的に立ち上がる。口唇部は面取りがあり、端部は外傾し凹線状のくぼみがある。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。調整は外面が縦ハケ後横ナデ、内面は斜め～横ハケ後横ナデである。35は口縁部破片である。口径約24cmである。口縁部は大きく直線的に開く。口唇部は面取りがあり、端部は僅かに凹線状となる。胎土はc類であり、器壁は全体に薄い。調整は口縁部外面が横ナデ、内面は横ハケ後横ナデである。36は口縁部破片である。口径約24.5cmである。口縁部は頸部から直線的に開き、その後口唇部のみ強く外反する。口唇部は面取りが甘く、やや丸みをもつ。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。調整は口縁部外面が横ナデ、内面は斜めハケ後ナデとみられる。

B 2類：28は口縁部から胴部上半のおよそ半分が遺存する。口径約26cm、頸部径約14.5cm、頸部から口縁部までの高さ約15cmである。口縁部は頸部から開き、端部で僅かに外反する。口唇部は断面コ字形に面取りする。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。胎土はc類であり、頸部が最も厚く、口縁部、胴部に向かってそれぞれ次第に厚みを減ずる。調整は口縁部外面は縦ハケ後横ナデ、内面は斜め～横ハケ後ナデ、胴部外面は肩部縦ハケ、中央横ハケ、同内面は横位の荒いヘラ削りである。29は口縁部破片である。口径約27cmである。口縁部は大きく開き、端部で僅かに外反する。口唇部は面取りがあるが、やや甘く丸みをもつ。胎土はc類であり、器壁は全体に厚い。調整は外面ナデ、内面は斜め～横ハケ後ナデである。30は口縁部から頸部まで遺存する。口径約27.5cm、頸部径約14cm、頸部から口縁部までの高さ約13.5cmである。口縁部は頸部から大きく開き、かつ全体に緩やかに外反する。口唇部は強い面取りがあり、端部は凹線状となる。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。調整は口縁部外面が縦ハケ後横ナデ、内面は斜め～横ハケ後ナデ、肩部内面は横位ヘラ削りがみられる。31は口唇部から頸部付近まで遺存する。口径約28.5cm、頸部径約14cm、頸部から口縁部までの高さ約14cmである。口縁部は頸部から大きく開き、さらに端部で強く外反する。口唇部は強い面取りがある。端部は凹線状となり、上下にやや引き出されている。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。調整は外面が縦ハケ後横ナデ、内面は摩滅が進むが斜め～横ハケ後ナデである。37は口縁部破片である。口径約27cmである。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は面取りがあり、下端を若干引き出す。胎土はc類であり、器壁はやや厚い。調整は外面が横ハケ後横ナデ、内面は強い横ナデである。38は口縁部破片である。口径約26.5cmである。口縁部は緩やかに外反しながら広がる。口唇部は面取りがあり、端部は外方へ引き出す。胎土はc類であり、器壁はやや薄い。調整は口縁部外面が縦ハケ後横ナデ、内面は横ハケ後ナデである。

40は口縁部破片である。口径約29cmである。口縁部は緩やかに外反しながら広がる。口唇部は面取りがあり、断面コ字形となる。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって厚みを増す。調整は口縁部外面が縦ハケ後強い横ナデ、内面は摩滅のため不明である。

B 3類：39は口縁部破片である。口径約30cmである。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口唇部外面は削り出し状の段がある。口唇部端面は外方に引き出すような面取りがあり、端部を丸く仕上げている。胎土はc類であり、器壁は全体に均質である。調整は外面が縦ハケ後横ナデ、内面は

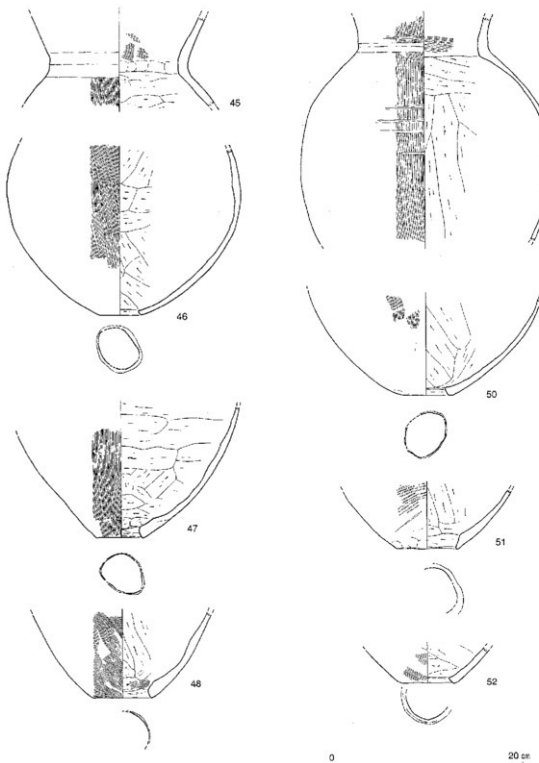


Fig.17　卯内尺古墳出土遺物４（縮尺１／４）

斜め～横ハケ後横ナデである。41は口縁部小破片である。口径約32cmと復元される。口縁部は大きく広がる。口唇部は面取りがあり、端部を外方に引き出す。胎土はc類であり、器壁は頸部に向かって次第に厚みを増す。調整は外面が横ナデ、内面は横ハケ後横ナデである。

42～44は口縁部の小破片である。42は口縁部が僅かに外反しながら立ち上がる。口唇部はコ字形に面取りをし、上端を摘み上げる。胎土はc類であり、厚みは均質である。内面に刻痕がある。調整は内外面共にナデである。43は口縁部が強く外反しながら立ち上がる。口唇部は面取りがあり、両端を引き出し、丸く仕上げる。胎土はc類であり、器壁はやや厚みがある。調整は外面が強いナデ、内面は摩滅し不明であった。44は口縁部の直線的に立ち上がる。口唇部は面取りが強く、部分的に凹線状をなす。端部を横方向に強く引き出し、かつ丸く仕上げる。胎土はc類であり、器壁はやや薄い。内外面共に横ナデである。

45、49は頸部～胴部である。45は頸部から肩部の破片である。肩部径約14.5cmを測る。図上での傾きは多少の誤差がありうる。個体識別では樹立していた底部46と同一個体の可能性があるが、接合はしない。肩部の屈曲は強いナデで区分され、緩やかである。胎土はc類であり、器壁は頸部から胴部が厚い。調整は頸部外面は摩滅により不明、内面は屈曲部は指押さえ、その上位は横ハケ後ナデである。49は前方部二段目斜面に集中出土した。頸部から胴部破片で、全体の三分の一ほどが遺存する。肩部径約13.5cm、胴部最大径約26cmを測る。肩部の屈曲はやや緩やかであり、外面の強い横ナデで区分されている。胎土はc類であり、器壁は頸部が最も厚く、口縁部に向かって薄くなる。また、胴部は薄い。調整は頸部が外面縦ハケ（僅かに横ハケ）、内面は横ハケ後横ナデ。胴部は外面が縦ハケ後肩部のみ横ハケ、内面が上位に横位の荒いヘラ削り、中位より下に荒い縦位のヘラ削りがある。

46～48、50～52は底部である。なお、これらは厳密には壺形埴輪A類であるのか、B類であるのかは不明である。46は胴部中位～底部である。胴部は球形であり、底部に焼成前穿孔がある。穿孔は4.5cm×3.5cmの不整楕円形である。穿孔面は外傾し、切り面は僅かに砂粒の動きがみられるが、平滑である。胎土はc類、器壁は比較的薄く仕上げられている。調整は胴部外面が縦ハケ、底部は指押さえ後ナデ、内面は胴部中位が荒い横ヘラ削り、上半部と底部は斜めヘラ削りである。47は胴部下位～底部である。B類埴輪の口縁部30と同一個体とみられる。胴部はやや長胴気味であり、底部に焼成前穿孔がある。穿孔は4.5cm×3.5cmの不整卵形である。穿孔面は外傾する。胎土はc類、器壁はやや厚く、特に底部は内面の削りが弱いせいか1cm以上の厚さがある。調整は外面が縦ハケ、内面は胴部下位が荒い横ヘラ削り、底部付近は荒い斜めヘラ削りであり、穿孔部は一部ハケ調整状となる。48は胴部下位～底部である。胴部はやや長胴気味であり、底部に焼成前穿孔がある。穿孔は径約5cmの円形と推定される。穿孔面は外傾する。胎土はc類、器壁はやや厚く、特に底部は削りが弱いためか1cm以上の厚さがある。調整は外面が斜めハケ、内面は胴部下位が荒い縦ヘラ削り、底部付近は荒い斜めヘラ削りであり、一部ハケ調整状となる。50は胴部下位～底部である。胴部は球形と推定され、底部に焼成前穿孔がある。穿孔は5cm×4cmの不整楕円形である。穿孔面は外傾し、切り面は削りのままである。胎土はc類、器壁は底部付近が厚みを増すが、全体に薄く仕上げられている。調整は胴部外面が縦ハケ後ナデ、内面は丁寧な斜めヘラ削りである。51は底部付近の破片である。底部に焼成前穿孔がある。穿孔は長軸約5cmの楕円形と推定される。穿孔面は内傾する。胎土はc類、器壁は底部がやや厚く、上部にしたがい薄くなる。調整は外面に横位の叩き痕があり、その後ナデている。底部付近はやや下方に引き出し指押さえとナデで仕上げる。内面は胴部下位が縦ヘラ削り、

底部付近は横ヘラ削りである。52は底部破片であり、焼成前穿孔がある。穿孔は4.5cm～5 cmの略円形と推定される。穿孔面は外傾し、切り面はナデにより平滑である。胎土はc類、器壁は全体に薄く仕上げられている。調整は外面が縦斜めハケ後ナデ、内面は斜め～横ヘラ削りである。

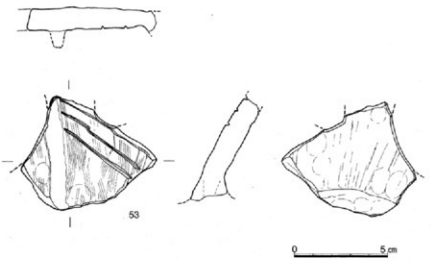


Fig.18　卯内尺古墳出土遺物5（縮尺1／2）

c、異形形象埴輪（Fig.18）

胎土は壷形埴輪とはやや異なり、砂粒は含むものの緻密である。焼成も堅緻で、器面の風化はさほど進んではいない。色調も明るく、他の埴輪片とは明瞭に区分される。出土したのは図示した小破片1点であり、他の出土土器類全てを再確認したが類似の破片を得ることはできなかった。

この破片は二ヶ所に透かし孔が認められる厚さ1 cm前後の平板なものであり、表面と裏面に剥落痕がある。裏面の剥落痕から45°の角度で本体に接続していたと考えられる。また表面の剥落痕には、幅7 mm程度の鰭状の突帯が付属していたと考えられる。さらにこの突帯痕から4 cm離れた位置に並行する隆起部があり、屈曲部か、次の突帯の存在が推定される。

全体の器形は不明であるが、裏面の接続部を下面にすると、高さ5 cm、幅7 cmを測る。縦断面を見ると僅かに内湾気味となっている。二ヶ所の透かしのうち、左側は緩い曲線があり、その開口部に鰭状突帯が接する。右側は三角透かしの先端部か。器面は指押さえ、ハケ調整後、なでられている。内面は補強の粘土をヘラ工具で押し付けているためにやや凹凸がある。なお、表面には突帯痕から発し約45°で下方へ三条の並行沈線が刻まれている。

この埴輪片は特殊な形状であり、小破片のために復元が困難である。裏面の接続状況や僅かな内湾気味の器形、鰭状突帯などからあえて類推すると、隅丸方形もしくは楕円形の台座に透かし孔のあるドーム状の器形が考えられる。類例を探すと、いわゆる冠形埴輪（清水1996）の特徴との関連する可能性を指摘できる。ただし、透かし孔の位置、その複数存在などから疑問も残る。今後の類例を待ちたい。

Fig.19　墳丘出土の玄武岩板石（一部）

2、石材

本古墳では大きく二種類の石材が検出された。それには、（1）墳丘表面に葺石と敷石に使用された円礫。（2）後円部墳丘斜面の覆土中に点在したり、

墳丘遺存残丘の周辺において採集された玄武岩板石がある。

（1）には、墳丘内各平坦面の敷石に用いられた径10cm以下の円礫、墳丘斜面の葺石に用いられた10～20cm前後の円礫、葺石下段根石に用いられた長軸20cm以上の円～亜円礫と、大きさにおいて三種類に区分できる。これらの特徴は肉眼観察であるが、隣接する老司古墳の利用円礫と共通し、早良花崗岩を上とし、ペグマタイト、石英岩、閃緑岩などを含んでいる。早良花崗岩は福岡市の南部地域に広く分布し、古墳東側を流れる那珂川の河原で円礫を採集することが可能である。

（2）は厚さ7cm前後の板状石材であり、およそ30点が採集された（Fig.19）。それには長軸30cm前後、短軸20cm前後の長方形を基調とする大きさの一群（15点）と、長軸25cm以下、短軸15cm以下の一群（15点）がある。特に前者には石材の周囲に調整痕が認められることから、この大きさに対しては一定の規格があったと考えられる。この板状石材は、暗灰色、緻密であり、岩石的特徴から老司古墳石室石材と同様の「粗面玄武岩」と判断される。これらは、葺石など墳丘外表での使用は認められず、また外表施設に利用されたとも考え難い。後円部側に集中することから、本来後円部頂部にあった埋葬施設に用いられた石材が後世に破壊され、墳丘斜面に散在したものと考えられる。

なお、上記以外に花崗岩の板石も採集されている。これは一辺が25cm程度、厚さ7～8cmの長方形であり、一平面に円礫面が認められる。（1）と同石材の早良花崗岩である。

3、墳丘下出土遺物（Fig.19）

本古墳の調査過程に墳丘の断ち割りトレンチを二ヶ所に設定した。このうち前方部側は墳丘盛土下はすぐに基盤である花崗岩バイラン層に達したが、後円部側は墳丘構築以前の浅い谷地形に重複したために1m以下ではあったが、古い堆積層が観察された。この堆積層中からは古墳い先行する一時期の遺物が出土した。まず基盤層に近い層からは黒曜石製の剥片が1点出土した。小破片であったが表面の風化が進んでおり、後期旧石器時代の遺物と見られた。同様の剥片は老司古墳でも出土しており、この地域の丘陵上には該期の遺跡が分布していると予測される。

また、旧地表下の層からは弥生時代の遺物が少量出土した。遺物は土器類であり、甕（54）、壷（55、56）がある。54は如意形口縁に浅い刻みを施し、胴部上位に断面三角形の突帯を貼り付けている。55は無頸壷の口縁部破片である。砂粒多く風化が進んでおり、調整、法量などは不明である。56はミニチュアとも見られる小型壷の胴部下半～底部破片である。やはり砂粒多い。削り出しによる低い高台状の底部である。これらの土器類は弥生時代前期後半に位置付けられる。なお、トレンチや残丘壁面などの観察ではこの時期の遺構は確認できなかった。この時期の遺構は古墳の造られた丘陵頂部から尾根線に沿って展開していたと推定できる。

Fig.20　その他の遺物（縮尺1／4）

第4章　埋葬施設と副葬品の検討

今回発掘調査をおこなった卯内尺古墳では、埋葬施設は検出されていない。古墳の中心に近い後円部や前方部の中央側は早く造成工事や土取りにより失われ、合わせて古墳墳部は全周が破壊され、数～十数mも下まで削平されていた。こうした破壊は明治年間には相当進行していたとみられ、1960年代までにはほぼ調査前の残丘状態に近づいたと考えられる。

後述する江藤正澄氏の記録からみると、明治20年以前に古墳中心部の埋葬施設が掘られたことがあり、一部の副葬品が取り上げられているようである。この掘り下げがいつ頃行われたことであるのかは不明である。この掘り下げが先の造成工事や土取りにともない行われたのか、あるいは単独で行われたものかも不明である。

いずれにしても今回の発掘調査では、卯内尺古墳の埋葬施設について直接明らかにすることはできなかった。以下では、本古墳の埋葬施設に関わる記録などを検討する。また、調査時に出土した石材などの検討によりその復元を試みたいと思う。

1、江藤正澄著『福陵雑纂』について

旧秋月藩士江藤正澄氏の自筆本『福陵雑纂』は現在九州大学図書館蔵書となっている。この中で卯内尺古墳に関わる記載部分は二ヶ所ある。まず『雑纂』二に「古鏡の記」として、明治20年に福岡士族帆足可楽氏より古墳発掘の様子を聞き取り、詳細に記述、考察した部分がある。次に『雑纂』三に古墳から出土したといわれる鏡を図と文で示している。

「古鏡の記」はFig.21に複写を掲載した。全体としては長い文章であるが、ここでは前半の古鏡の発見に関わる聞き取り部分のみを抜き出した。また、以下に読み下しをおこない、若干の解説を行う。釈文にあたっては福岡市博物館乂野誠氏にご教示をいただいた。記して感謝したい。

「古鏡の記

茲年明治20年10月ばかり、早良郡姪濱網屋町なる帆足可楽主が古鏡を携え来りて予に示し、話はむかしより我が家に傳へし、那珂郡老司村なる字宇内尺、俗に城辻山と云う小山の頂きより掘り得たるものにて、そのところに老松の二株が並び立てり、かたわらに古き樹の朽たるが二株あれど、何の木たるをつまびらかにせず。また、頂上は凡そ三十坪も有りぬべし、周りに石垣を築きたり。村人はその頂き二尺ばかりは、古くより雪の積もりし事はなしという。傳へたりその埋もれたる様は、頂きより少し下りて掘りたりしに、深さ二三寸に尾の如き濱石を敷き、その状況はさながら屋根の如し。その下一間余りは常の土にて替ることなし。又その下に三重に小石を敷き詰め、その下は赤土にて炭又は灰を混し、そのまた下は常の土なり、猶（なお）掘ること一間余りにて炭を敷く、とくに堅く石の如し。その下弐尺ばかりに一尺四方程の石を置く。重きこと常ならず。その下に小石を三段に重ね、幅壱尺三寸、高さ五寸ばかりの湿気抜きとおぼしきものを設けたり。またその下四尺ばかりにその古鏡を埋む。鏡を三重に折りて包み、下は白土を敷き古鏡の上には長さ一尺ばかりの剣を横たへたり。すでに腐りて形さだかならず。

さて、この記録は明治20（1987）年10月に、現在の福岡市早良区姪浜付近に在住されていた当時福岡士族の帆足可楽氏から帆足家所蔵の古鏡について、出土のいきさつを聞き取り、記述したものである。記述内容は鏡を出土した古墳と見られる「小山」についてと、その墳頂部での古鏡の埋没状況に

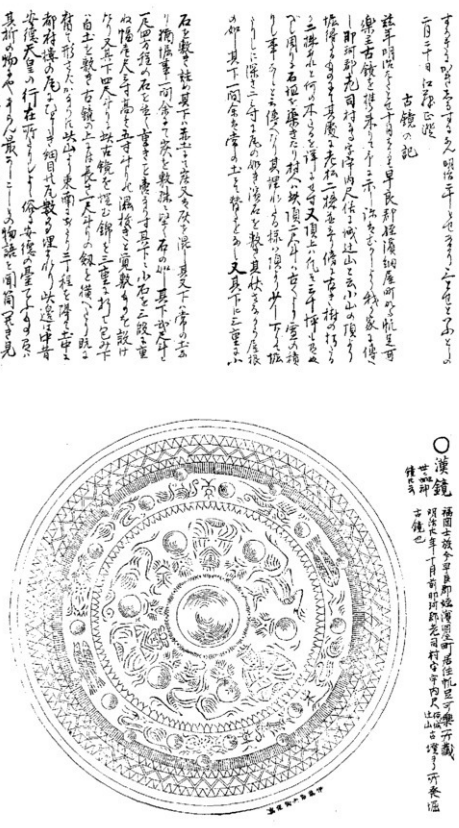


Fig.21　江藤正澄『福陵雑纂』二「古鏡の記」写他（縮尺１／２）

ついてに区分できる。古鏡は、現在の福岡市南区老司三丁目付近の城辻山と呼ばれる小山の頂部から掘り出したこと。この城辻山の頂部は、周囲に石垣があり、広さはおよそ30坪（100㎡）弱であった。地元住民の言い伝えではその頂部には雪が積もらないという言い伝えがあったという。

この「城辻山」については、小字名であったと見られる。今回の調査時に地元の幾人かの方に伺ってみたが、現在その地名を確認することはできなかった。しかし、1969年時点で故森貞次郎氏が地元の中村憲之助氏から、この中村病院内の残丘付近こそ該当地との証言を得ていることから、この場所であったと考えられる。なお「小山の頂」というなら後円部頂と推定され、その示された広さがある程度生きるのであれば径11m程度の墳頂平坦面が想定できようか。

「頂より少し下りて掘り」、深さ6～10cmで「尾のごとき浜石」を敷き、「屋根のごとし」とあるのは後円部墳丘斜面の葺石の状況を説明した文とみられる。ただし「その下一間（1.8m）余りは常の土にて」とあるのは、そのまま墳丘斜面葺石直下からの盛土の説明と読んでよいのか、それとも再び墳頂部からの説明であるのかは判り難い。いずれにせよ2m程度の盛土を指摘しているのであろう。

さて続けて「またその下に二重に小石を敷き詰め、その下は赤土にて炭又は灰を混し、そのまた下は常の土なり、なお掘ること一間（1.8m）余りにて炭を敷く、とくに堅く石の如し。その下弐尺（60cm）ばかりに…」はどの部分を示しているのであろうか。先の盛土からの連続した説明とするな

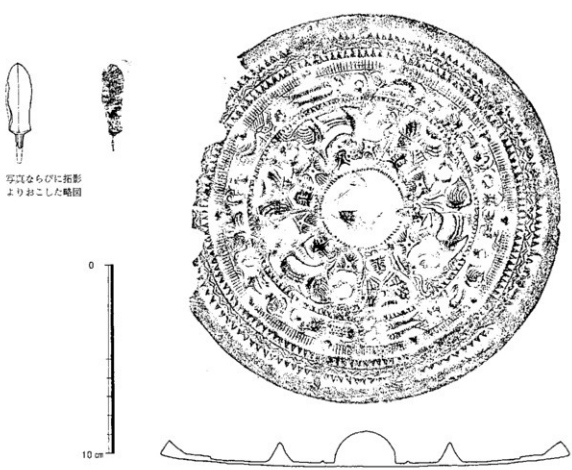


Fig.22　卯内尺古墳出土と伝える銅鏡、銅鏃（縮尺1／2）
三木文雄1989より引用、一部改変

ら、二間と二尺でおよそ4.2mとなり、主体部までの層が厚くなり過ぎるきらいがある。特に墳丘斜面からでは説明し難い。この部分は後の説明から見て、主体部直上までの墓壙内埋め土の状況であることは間違いない。であるなら、この部分の説明は次の三通りの解釈ができよう。

1）あくまで、墳丘斜面からの掘削によるものであり、層厚の説明は原則として正確である。ただし、墳丘中央に向かっての掘削のために斜めの距離を測ってしまった。

2）「そのド一間余り」から墳頂部の説明であるが、数値の記憶や記載に誤りがある。

3）最初の一間は墳丘斜面の説明であり、それ以降は墳頂部からの掘り下げの説明であるのを、江藤、帆足両氏の何れかの説明不足から記述に混乱が生じた。

この三つの想定を比較すると、

1）の場合ならば墳頂からの深さは不明であるが、後円部平坦面径から考えると主体部に達するには水平方向に4m以上掘削せねばならない。これはかなり困難な作業であるし、記述とも整合しない。2）の場合で、それぞれ半間程度なら合わせて2.4mほどとなりおよそ整合する。3）ならば墳頂から2.4mである。

こうした点から著者は2）もしくは3）の可能性を指摘しておきたい。

ところで、続く文章にある「三重に小石を敷き詰め」という一文は、墳頂部平坦面からある程度下方の墓壙内に小石が層状に堆積していたということになる。事実だとするとやや特異な状況であるが、隣接する老司古墳に注意すべき事例があるのでふれておきたい（山口譲治他編1989）。それは老司古墳第三主体部の墓壙内埋土で、墳頂部から約2mの深さにあり、石室を被覆する西側土層（同報告書20頁、図11）のうち、69層上部、71層上部、73層に径10cm以下の円礫が層状に分布している点である。これらの層は相互に10～20cmの間層をはさんでいわば重なり堆積している。こうした石室被覆土に円礫を繰り返し面的に敷き詰める手法は、現時点において他の古墳での類例を見出していないが、刳抜尺古墳との関連を指摘しておきたい。

さらに下部の埋土について「赤土にて炭又は灰を混し」、「灰を敷く、とくに堅く石の如し」とある。この部分は埋土中に認められた赤土と、それとは明瞭に異なる黒色もしくは暗色の堆積物の互層堆積を示していると推定できる。しかし、墳丘盛土中に炭化物や灰を混入する例は中～後期古墳に少なくないが、前半期古墳では稀であり、特に墓壙内埋土となる類例を聞かない。この記載をそのまま事実として認めてよいのか、あるいは単に腐植土やクロボク土などの黒色土を「炭」もしくは、「灰」と誤認してしまったのか検討を要する。

なお前方部トレンチにおいて墳丘盛土直下の地山直上や旧地表面において炭化物の分布が認められた。このような例は多くの古墳において認められるもので、墳丘構築前の何らかの活動を示している。ここでの「炭」「灰」は墓壙内であり、これとは異なり、区分すべきである。

2、埋葬施設について

「堅く石の如し。その下弐尺（60cm）ばかりに」から後の文章「一尺四方程の石を置く…」からはじまる文はその内容から見て埋葬主体に関わる説明と考えられる。つまり埋葬施設のと副葬品の出土状況についての記載である。短い文ではあるが、注意してみたい。

まず、一尺（30cm）四方程の石と、その下に小石を二段に重ねて造られた「幅壱尺三寸（40cm）、高さ五寸（15cm）ばかりの湿気抜きとおぼしきもの」があったという。つまり石材を用いて構築した何らかの施設の存在を指摘している。「湿気抜き」とおぼしきものの実態が不明であるが、石材を用いた地下における「湿気抜き」とは、石組の導水路や暗渠施設などが想像されよう。ここで一尺四

方程の石は「垂きこと常ならず」とあり、「四方」とする平面的な記載であることから、板状の石材を予測させる。なお示された石材には二種があり、「一尺四方程の石」と「小石」と表現されている。先の墳丘出土遺物の項で示した玄武岩板石材にも大小があり、それぞれ大きさや特徴が一致している。ここに記された二種の石が同様の玄武岩板石を示している可能性は高い。両者は上下関係にあり、かつ幅と高さが計測されている。ということは、「一尺四方程の石」は蓋石であり、「小石」はその下に積み上げられていたものと想定される。それらは一体の構築物をなし、かつ「湿気抜き」を思わせる状況であり、全体として計測可能な状況であったと考えられる。一つの可能性としては素掘りの溝に「小石」を敷き詰め、その上を「一尺四方程の石」で蓋としたものである。もう一つの可能性としては蓋石の下に空間があり、両壁に三段の「小石」が積み上げられた状態であったとみるのである。前者の場合、埋葬主体部から墳丘外へ連なる排水溝として、こうした石を充填する暗渠施設が利用される場合がある。しかし、そうした施設に蓋石を用いた例は、弥生時代後期後半の岡山県楯築遺跡の排水溝などの一部を除いて、特に古墳時代では確認できない。後者の場合、そうした空間を有する構築物は、前期古墳の付属施設としては類例がない。したがって、ここに記されたような遺構は常識的にみるなら排水用の施設などではない。あえて類推するなら石室の上部が埋没を免れて一部空間を残していた状況に近いものといえよう。示された幅と高さはその内法の計測値とみるのである。幅と高さが示されているにも関わらず、長さが示されていないのは、その空間が棺槨範囲外に延びていたからと見ることができる。「またその下四尺（120cm）ばかりにその古鏡を埋む…」とした次の一文からこの石組遺構が古墳に伴う暗渠施設とみることを否定する。それは古墳に伴う暗渠施設が例外なく、埋葬施設の底面より低い位置に設けられるからである。やはり「湿気抜き」に見えただけであると理解すべきであろう。その下から副葬品の出土があったことからも、この施設が埋葬遺構の上部であったことを傍証しよう。副葬品の出土水準は「その下120cmばかり」とあり、ここでいう「その下」が蓋石上面からの数値であるのか、それとも三段の「小石」下面からの数値であるのか不明である。しかし、このことから蓋石から副葬品の出土した面までの高さは135～120cmの範囲と考えられる。

こうした点からここに記述された石組遺構は埋葬施設の上部であり、内部は流入した埋土により埋め尽くされ、天井部付近が僅かに高さ15cmほど空間を残していた状況であったと推測したい。なお幅、高さのみの記載であり、長さが触れてないこと、「湿気抜き」と見えたことなどから、この空間の長軸方向に壁が存在するとは考えられていなかったようだ。奥が埋没により閉鎖していたのか、あるいは奥に相当深かったために、開放された（天井）部分から小口部の壁を見ることも、奥行きとなる長さを測ることも困難であったと予測されよう。

さて、ここで推定される埋葬施設の構造について若干の検討をしたい。天井石の存在すること、奥行きが不明であること、さらに高さ15cm程の間に三段の石積みがあることから、箱式石棺や石棺系石室を含む小石室とは考え難く、長さ数mに達する竪穴系の石室である蓋然性が高い。また、「一尺四方程の石」では幅一尺三寸（約40cm）の空間に天井石として直接懸架することは困難である。石材の対角線を利用し、かつ側壁にもち送り技法を用いる必要がある。もちろん墳丘上の覆土中で採集された玄武岩石材には、長軸幅30～50cmと多様であり、記述の中の「程」が示す範囲と解釈できる。

石室内部の状況は不明であるが、副葬品の出土状況にふれて、「下は白土を敷き」とある。石室底面に水成粘土などを敷いていたことを予測させ、木棺などの床面形成、被覆などがあったとみられる。「古鏡の記」に記述された埋葬施設が卵内尺古墳の中心主体であるのかは不明であるが、以上の検討からみて、この古墳には比較的規模の大きな竪穴系の埋葬施設が存在したと予測される。

3、埋葬施設に関わる遺物

現在、卯内尺古墳出土と伝えられる遺物には鏡1面と銅鏃1点があるのみである。「古鏡の記」では「錦を三重に折りて（古鏡を）包み、下は白土を敷き古鏡の上には長さ一尺（30cm）ばかりの剣を横たへたり。すでに腐りて形さだかならず。」とあり、他に、錦、剣などが存在したと記されている。もちろんこの内容が本古墳の副葬遺物の全体を示しているとは限らない。錦はおそらく鏡に付着した状態で出土したのであろうが、写真や拓影などを見てもその痕跡を認めることはできない。おそらく出土後まもなく除去されたのであろう。剣は長さ30cmばかりと、やや小型の部類である。腐食状況から鉄製であったと推定されるが、鏡の上に「横たえり」とやや特異な出土状況が記されている。同じ面で出土したのか、間層があったか不明であるが、棺外副葬の可能性も視野に入れておくべきであろう。なおこの剣は現存せず、当時取り上げられたかも定かではない。銅鏃については記載がなく、鏡と同時に握り出されたものか、別の時点に採取されたものか不明である。

4、卯内尺古墳出土と伝える遺物について

卯内尺古墳からは鏡1面、銅鏃1点、（鉄）剣1点、錦などの出土が伝えられているが、現在確認できるのは鏡1点と銅鏃1点である。何れも現時点において個人蔵となっている。

鏡は仿製三角縁獣帯三神三獣鏡である。すでに三木文雄氏により詳細な報告（1989）が行われているので、解説はそれに譲り、ここでは要件のみを記す。

鏡は面径22.0cm、青面径21.6cm、緑径1.8cm、同高0.8cmを測る。1966年に三木文雄氏によりとられた写真、拓影によると、鋸歯文帯より外側の外縁部が全周のおよそ四分の一ほど欠損している。ただし1887年に記録された『福陵雑纂』三の図では完形鏡として描かれている。両者の記録のあいだに破損したものとも考えられる。ただし、後者の図は略図であり、復元図である可能性も残る。

鏡の特徴である上文の三神三獣は画象の省略、硬化が進み、6つの乳文で区分されている。さらに外縁と主文の内区との間の獣帯文中に10の乳文を付け、またその乳文と獣帯文の外側の鋸歯文の間にも10の小さな乳文を施している。このように本鏡では26に及ぶ乳文の多用という特徴が注目される。点数の多い三角縁三神三獣鏡の中で、このような乳文を有する鏡として、三木氏は6例を取り上げている。その中でも同笵の可能性をもつ鏡としては大阪府柏原市茶臼塚古墳出土鏡があげられている。

銅鏃は柳葉形を呈するものが1点あり、やはり三木氏による写真、拓影がある。それによると個縁ならびに茎部に欠損があり、現存長4.5cm、鏃長3.8cm、幅1.1cmを測る。錆化のためか中央の稜は不明瞭となり、外縁も相当痛んでいる。本来の形態復元や検討は困難である。

第5章　まとめ

本古墳は永年の造成工事により古墳基底部から破壊され、くびれ部付近をわずかに残す状況で確認した。そのために、通常の古墳調査の成果としての規模、埋葬主体、副葬品などを直接知ることはできなかった。しかし、残存した僅かな墳端線、墳丘の一部、現況の周辺地形測量、過去の記録などを検討し、ある程度の項目について明らかにし、復元を試みることができた。

以下では、本古墳についての現時点で判明した内容について記述し、まとめとしたい。

卯内尺古墳は、全長73～78mと推定される前方後円墳である。調査時に墳丘は後世の造成などの撹乱で壊滅的状況であり、北側のくびれ部付近の墳丘がわずかに検出されたのみである。平野を見下ろす低丘陵の頂部に選地し、地山整形と盛り土により墳丘が築造されている。墳丘は前方部三段、後円

部二段築成であり、墳丘斜面には入念な葺石、平坦面には敷石が設けられていた。

墳丘築成は三工程で行われ、段築など墳丘外表の形成は最後の工程である。

埋葬主体部は後円部の地表下およそ2.4mにあったと推定される。故森貞次郎氏は主体部を粘土槨と推定している。しかし、今回あらためて「古鏡の記」を検討し、現時点では玄武岩板石で構築された竪穴系の石室であったと推定した。なお、本地域では老司古墳以前に横口を有する石室は考え難く、「竪穴式石室」の可能性を考えたい。石室の規模は不明であるが、上部幅40cm、高さ135～120cm、長さ数mと見られる。天井石は小さいが、これは隣接する老司古墳と共通する要素でもある。粘土床の可能性が高いが、木棺の有無、形式などは不明である。

本古墳の副葬品としては、主体部床面から鏡1面、銅鏃1点、(鉄)剣1点、鍔などの出土が伝えられている。鏡は仿製三角縁獣帯三神三獣鏡であり、同笵例の少ない型式である。

墳丘外表には壷形埴輪の樹立が認められた。確実に樹立していたのはくびれ部～前方部二段目平坦面のみであるが、破片の出土状況から少なくとも墳頂部にも樹立されていたと考えられる。

出土した壷型埴輪には二重口縁系と単口縁系があり、それぞれ口縁径により二、三型式に区分できた。二重口縁系の小、中型（A1，A2型）は、胎土に精製粘土を用いており、こうした素地と共に調整なども一般的な埴輪とは異なり、集落などで出土する壷類に近い特徴をもつ。その他の二重口縁系大型（A3型）、単口縁系小、大型（B1，B2型）は共通した胎土、類似した調整である。何れも小破片が多く、図化できたものは少ないものの、胴部径に対し口縁径は大きくなく、底部の二次的な拡張もない。胴部内面には接合痕を消す程度の浅いヘラ削りを施している。穿孔は底部形成後行っている。こうした要素は老司古墳より明らかに古い特徴といえる。類例は乏しいものの、二重口縁系壷形埴輪の特徴から畿内編年の布留Ⅱ期、久住編年ⅢA期に位置付けておきたい。副葬品などの年代的な位置づけもこれに矛盾するものではない。

なお破片1点であるが、特殊な形象埴輪片も出土した。小片であり、判断に苦しむが、「冠形埴輪」の可能性を指摘した。形象埴輪としては福岡平野では最古の例であるものの、形式認定には疑問も残る。この点については今後追跡調査を進めたい。

こうした成果を経て、最後に本古墳の年代と本地域の位置づけについてふれておきたい。確実な出土遺物である壷形埴輪を基準とすると、本古墳は前方後円墳集成編年3期、あえて実年代を与えると、おおよそ4世紀中葉頃の築造であったと考えたい。福岡平野の最大級首長墓系譜に含まれよう。

以上、あまりにも推測が過ぎるかもしれないが、今回の調査を経て考えられる可能性を全て示し、今後の検討、批判を仰ぎたい。

最後になりましたが、1987年の老司古墳発掘調査以来、この卯内尺古墳についても何かとご指導、ご教示を仰いだ森貞次郎先生が1998年秋に逝去された。森先生は現地での踏査や三木文雄先生との交流などを通じて本古墳の研究に取り組まれていた。その地道な研究なくしては卯内尺古墳の存在は注目されることがなく、今回の調査そのものも有り得なかったかも知れない。ここに厚く感謝し、謹んでご冥福をお祈りしたい。

参考文献

清水真一1996『大和の大王の埴輪―冠形埴輪の成立と展開―』春季特別展図録　桜井市埋蔵文化財センター

山口譲治他編1989『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集　福岡市教育委員会

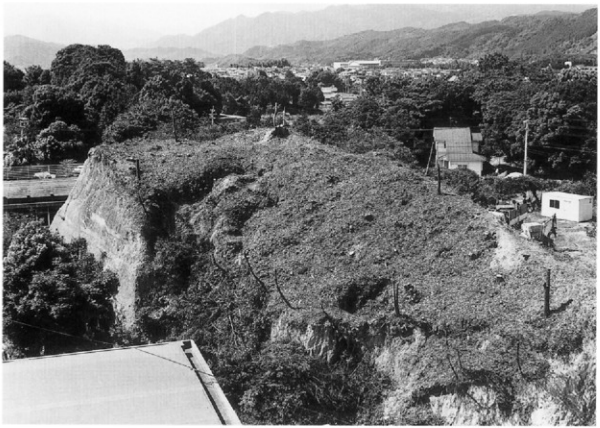
久住猛雄1999『北部九州における庄内式併行期の土器様相』『庄内式土器研究』19　庄内式土器研究会

卯内尺古墳出土遺物観察表

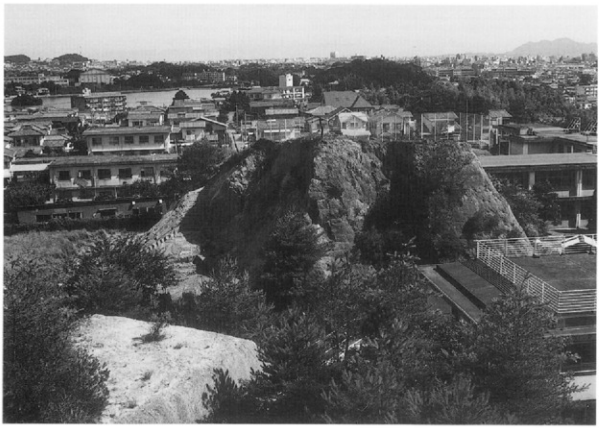
（口縁～器高の数値は cm 単位である）

番号	器種	残存率	出土地点	口径	頸部径	胴部径	底部径	器高	焼成	色調	赤色顔料	登録番号
1	二重口縁系	口縁部1／5	墳丘斜面	21	—	—	—	—	やや良	明赤褐色～明橙色	口縁部	91001
2	二重口縁系	口唇部欠損	墳丘斜面	—	—	—	—	—	やや良	橙色～明赤褐色	有り	91002
3	二重口縁系	口縁部下半1／8	墳丘斜面	—	—	—	—	—	やや良	橙色～明赤褐色	有り	91003
4	二重口縁系	口縁部1／5～1／6	表面採集	24	—	—	—	—	やや良	明黄褐色	口縁部	91004
5	二重口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	28	—	—	—	—	やや良	明橙色	有り	91005
6	二重口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—	—	—	やや良		有り	91006
7	二重口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—	—	—	やや良	橙色～明赤褐色	有り	91007
8	二重口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—		—	良	明橙色～明茶褐色	有り	91008
9	二重口縁系	口縁部小片	くびれ部一段目平坦面	—	—	—	—	—	良	橙色	有り	91009
10	二重口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—	—	—	良	赤褐色	—	91010
11	二重口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—	—	—	良		有り	91011
12	二重口縁系	口縁部1／8	くびれ部二段目平坦面	34	—	—	—	—	やや不良	橙褐色	口縁部	91012
13	二重口縁系	口縁部1／6～1／8	墳丘斜面	32	—	—	—	—	良	外－赤褐色　内－黄色	口縁部	91013
14	二重口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面	32	—	—	—	—	良	明黄褐色	口縁部	91014
15	二重口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面～くびれ部二段目平坦面	36	—	—	—	—	良	外－明赤褐色　内－明橙色	—	91015
16	二重口縁系	口縁、頸、肩部	後円部二段目斜面	38	15～16	—	—	口縁～肩部14	やや良	外－淡黄褐色　内－明茶色	口縁～肩部	91016
17	二重口縁系	頸、肩部片	くびれ部一段目平坦面	—	10	—	—	—	良	明赤褐色	—	91017
18	二重口縁系	頸、肩部1／6	くびれ部二段目平坦面	—	11	—	—	—	やや良	外－明赤褐色　内－黄褐色	—	91018
19	二重口縁系	頸、肩部1／6	くびれ部一段目平坦面	—	15	—		—	やや良	黄褐色	—	91019
20	二重口縁系	頸、肩部1／4	墳丘斜面	—	19～16	—	—	—	やや良	外－明赤褐色　内－黄褐色	頸部	91020
21	二重口縁系	頸、肩部1／4	墳丘斜面	—	—	上位～中位15		—	良	黄橙色	頸部	91021
22	二重口縁系	胴部中位1／2	くびれ部一段目平坦面	—	胴部高19.5	最大径24	穿孔径4	胴部高19.5	良	赤褐色	有り	91022
23	二重口縁系	胴部中位1／2～1／4	前方部二段目斜面	—	—	最大径23.5	穿孔径4.8	胴部高21	良	赤褐色	有り	91023
24	二重口縁系	底部	墳丘斜面	—	—	—	穿孔径7	—	良	外－にぶい赤褐色　内－明赤褐色	—	91024
25	二重口縁系	底部	くびれ部一段目平坦面	—	—	—	穿孔径6	—	良	橙色	—	91025
26	二重口縁系	底部	くびれ部二段目平坦面	—	—	—	穿孔径9	—	良	橙色～明赤褐色	—	91026
27	単口縁系	口縁～頸部1／7～1／8	墳丘斜面	23	14.5	—	—	口縁～頸部14.5	良	黄橙色	有り	91027
28	単口縁系	口縁部1／2	くびれ部一段目平坦面	26	14.5		—	口縁～頸部15	良	黄橙色	有り	91028
29	単口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面	27		—	—	口縁～頸部12	良	外－茶褐色　内－黄褐色	有り	91029
30	単口縁系	口縁部1／5	くびれ部一段目平坦面	27.5	14	—	—	口縁～頸部13.5	良	外－黄橙色　内－茶橙色	—	91030
31	単口縁系	口縁部1／8	前方部二段目平坦面樹立	27.8	14	—	—	口縁～頸部14.2	良	外－赤～茶褐色　内－黄褐色	—	91031
32	単口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面	21	—	—	—	—	良	外－茶～暗褐色　内－茶褐色	—	91032
33	単口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面	21.5	—	—	—	—	良	外－黒灰～暗褐色　内－黄橙色	有り	91033
34	単口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面	33	—	—	—	—	良	外－黄～暗褐色　内－明橙色	—	91034
35	単口縁系	口縁部1／8	墳丘斜面	24	—	—	—	—	やや良	黄橙色～黄灰色	有り	91035
36	単口縁系	口縁部1／7～1／8	墳丘斜面	24.5	—	—	—	—	やや良	外－暗褐色　内－黄橙色	有り	91036
37	単口縁系	口縁部1／10	表面採集	27	—		—	—	良	外－黒灰色　内－明橙色	有り	91037
38	単口縁系	口縁部1／7	墳丘斜面	26.5	—	—	—	—	良	黄橙色	有り	91038
39	単口縁系	口縁部1／4	くびれ部一段目平坦面	30	—	—	—	—	良	黄橙色	有り	91039
40	単口縁系	口縁部1／6	墳丘斜面	29	—	—	—	—	良	黄橙色	有り	91040
41	単口縁系	口縁部1／7～1／8	墳丘斜面	32	—	—	—	—	良	黄橙色	有り	91041
42	単口縁系	口縁部破片	墳丘斜面	—	—	—	—	—	良	黄橙色	—	91042
43	単口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—	—		良	黄橙色	有り	91043
44	単口縁系	口縁部小片	墳丘斜面	—	—	—	—	—	良	黄橙色	有り	91044
45	単口縁系	頸部1／3	墳丘斜面	—	頸部～肩部14.5	—	—	—	やや良	黄橙色	有り	91045
46	不明	胴部中～底部2／3	前方部二段目平坦面樹立	—	—	最大径24.5	穿孔径4	—	やや良	外－赤褐～暗赤褐色　内－赤褐色	有り	91046
47	不明	底部2／3	前方部二段目平坦面樹立	—	—	—	穿孔径4.5×3.5	—	やや良	黄褐色	有り	91047
48	不明	底部1／4	くびれ部一段目平坦面	—	—		穿孔径5.5	—	良	明橙色	有り	91048
49	不明	頸～胴部1／3	前方部二段目平坦面樹立	—	肩部径13.5	最大径26	—	—	良	外－赤褐色　内－黄褐色	有り	91049
50	不明	胴部下半～底部2／3	前方部二段目平坦面樹立	—	—	—	穿孔径5×4	—	良	黄褐色	有り	91050
51	不明	底部1／4	後円部二段目斜面、平坦面	—	—	—	穿孔径長軸5	—	良	外－黄褐色　内－黄褐色	有り	91051
52	不明	底部1／3	墳丘斜面	—	—	—	穿孔径4.5～5	—	良	黄橙色	—	91052
53	形象	小片	くびれ部一段目平坦面	—	—	—	—	—	良	黄褐色	—	91053
54	壺	口縁部1／8	旧地表下	30	—		—	—	やや不良	黄橙色	—	91054
55	無頸壺	口縁部小片	旧地表下	—	—	—	—	—	やや不良	赤褐色	—	91055
56	壺	底部	旧地表下	—	—	—	3.5	—	やや不良	外－赤褐～黒灰色　内－黒褐色	—	91056

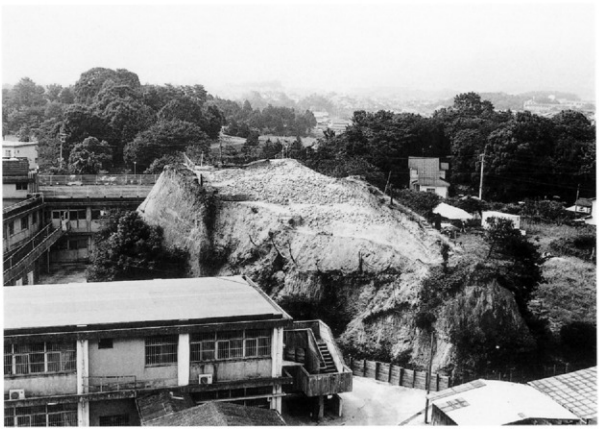
図　　版



1．卯内尺古墳調査前近景（北から）左後方の森は老司古墳

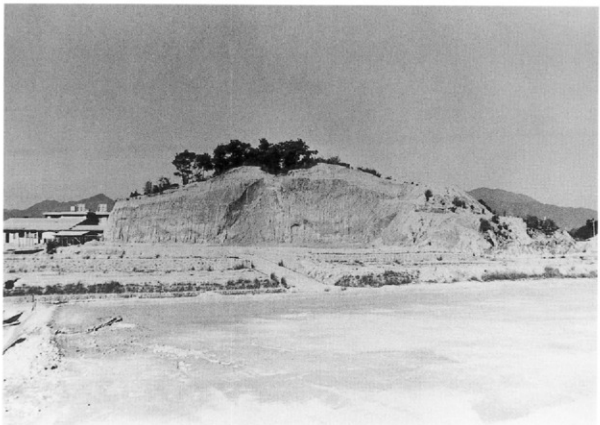


2．卯内尺古墳調査前近景（南から）

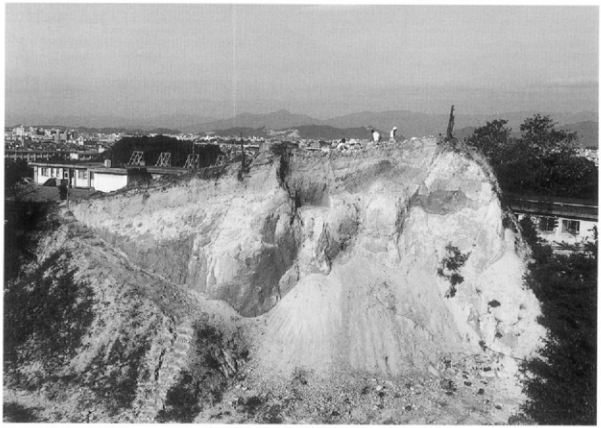


1．卵内尺古墳葺石検出状況（北から）左後方の森は老司古墳

2．卵内尺古墳葺石検出状況（上空から）



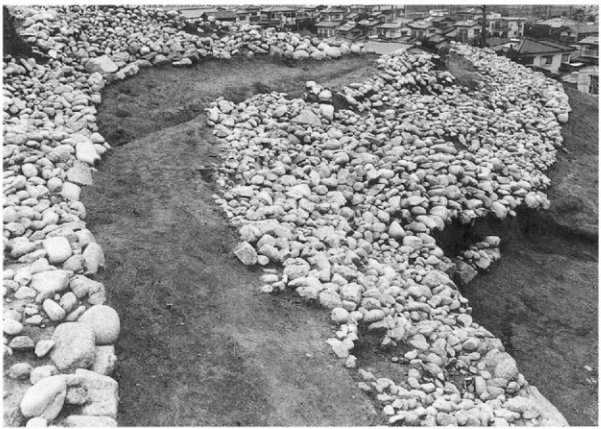
1．卯内尺古墳近景（西から）1960年代の撮影



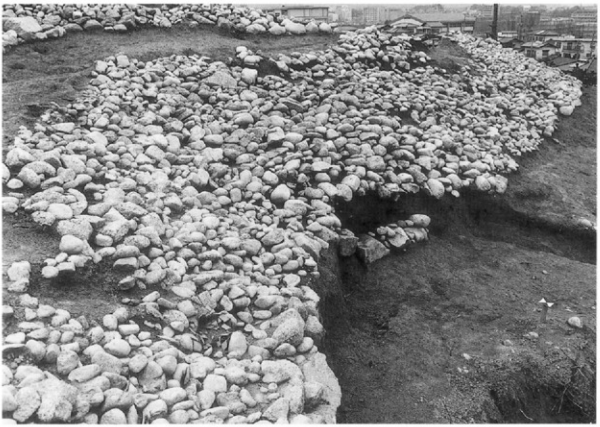
2．卯内尺古墳調査風景（西から）

1．卯内尺古墳葺石検出状況（北から）

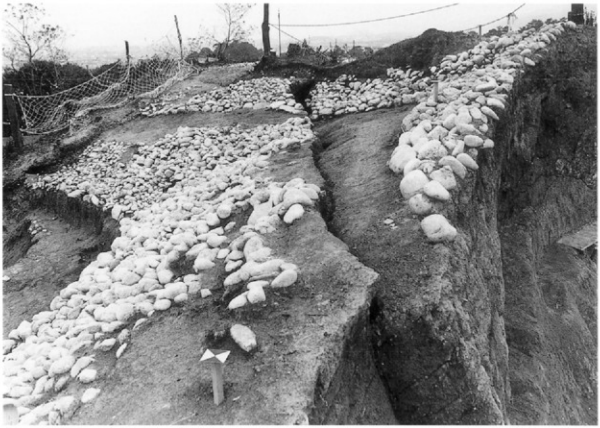
2．卯内尺古墳後円部葺石遺存状況（北西から）



1．卯内尺古墳後方部葺石遺存状況（東から）

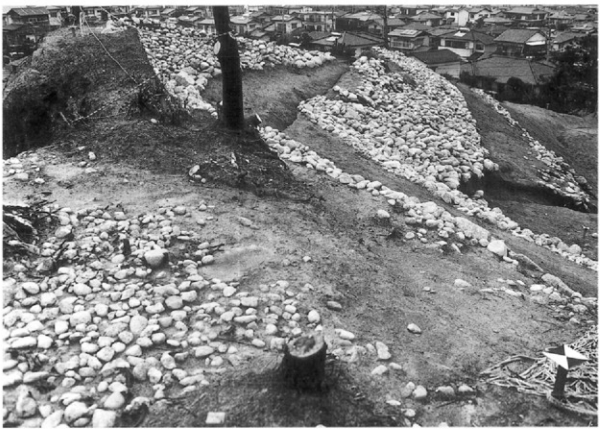


2．卯内尺古墳二段目くびれ部付近葺石状況（東から）

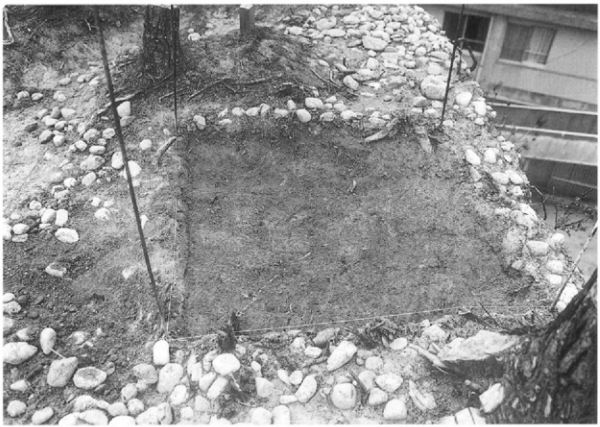


1．卯内尺古墳墳丘に発生した地割れ（西から）

2．卯内尺古墳三段目葺石遺存状況（北から）



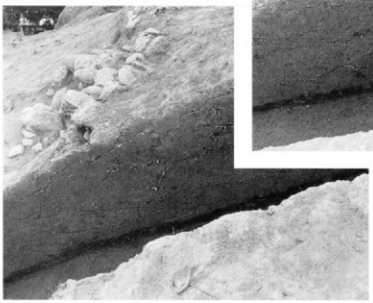
1．卯内尺古墳前方部頂平坦面敷石状況（東から）

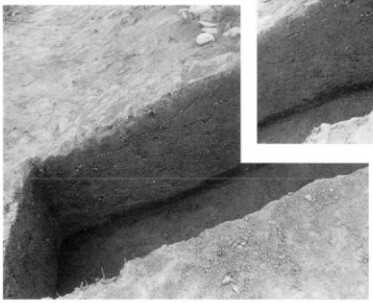


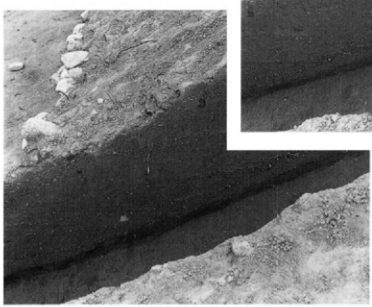
2．卯内尺古墳前方部頂平坦面敷石調査状況（西から）

1．卯内尺古墳前方部墳丘土層断面１（東から）

2．卯内尺古墳前方部墳丘土層断面２（東から）







2．卯内尺古墳後円部墳丘土層断面２（西から）分割写真１～５

1．卯内尺古墳後円部墳丘土層断面１（西から）

1．卯内尺古墳壺形埴輪46号検出状況（北から）

2．卯内尺古墳壺形埴輪50号検出状況（北から）

3．卯内尺古墳壺形埴輪47号検出状況（北から）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第690集
卯内尺古墳

2001（平成13）年3月30日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大神1丁目8－1
印刷　富士印刷株式会社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6 45－1